

EYEMATE

未来へつなぐ



アイメイト65周年記念誌

Index

巻頭グラビア	02
私の愛する目の仲間	
対談	04
初の国産盲導犬使用者 河相 浏さん × アイメイト協会代表理事 塩屋 隆男	
風を切って歩く いまを翔けるアイメイト使用者たち	06
佐藤 憲さん	08
西山 英敏さん	12
吉田 美津江さん	16
生田 明美さん	20
坂本 光男さん	24
磯村 千夏さん	28
盲導犬の父・塩屋賢一とアイメイトの歩み	32
塩屋賢一の生い立ち	34
盲導犬の育成を決意	35
盲導犬の完成	36
運命の出会い	37
国産盲導犬第1号	38
チャンピオンと後継者たち	39
塩屋賢一のメッセージ	40
いまなお続く、共生社会への道	41
アイメイトって知ってる？ What is EYEMATE ?	42
盲導犬ではなくアイメイト	43
視覚障害と歩行	44
アイメイト歩行の実際	45
訓練と歩行指導	46
コラム 銀座での忘れ得ぬ光景	51
支援の輪	52
私たちはアイメイト協会を応援しています	
視覚障害者の自立支援のために	54
東京都知事 小池 百合子氏	54
衆議院議員 厚生労働大臣 加藤 勝信氏	55
練馬区長 前川 耀男氏	55
寄付・支援の方法	56
アイメイトの一生 生まれてからリタイアまで	58
誕生／成長／訓練と歩行指導／家庭犬への道／現役	

Cover Photos

表紙：アイメイト使用者同士のご夫婦。
東京・銀座4丁目交差点で。銀座は歩行指導合宿の卒業試験が行われるアイメイトの聖地。お二人はその合宿で知り合い、卒業後にゴールインしました。

裏表紙：表紙のお二人が新婚の頃、クリスマス・イルミネーションをバックに撮った1枚。雨模様の寒い夜でしたが温かい空気に包まれました。

発行日 2022年10月23日
発行 公益財団法人 アイメイト協会
企画・構成・編集 株式会社 ユニ・プランニング
編集・執筆 内村コースケ
写真 内村コースケ、Eyemate Archive
デザイン・レイアウト dimple 鶴田めぐみ
印刷 株式会社 グラフィック

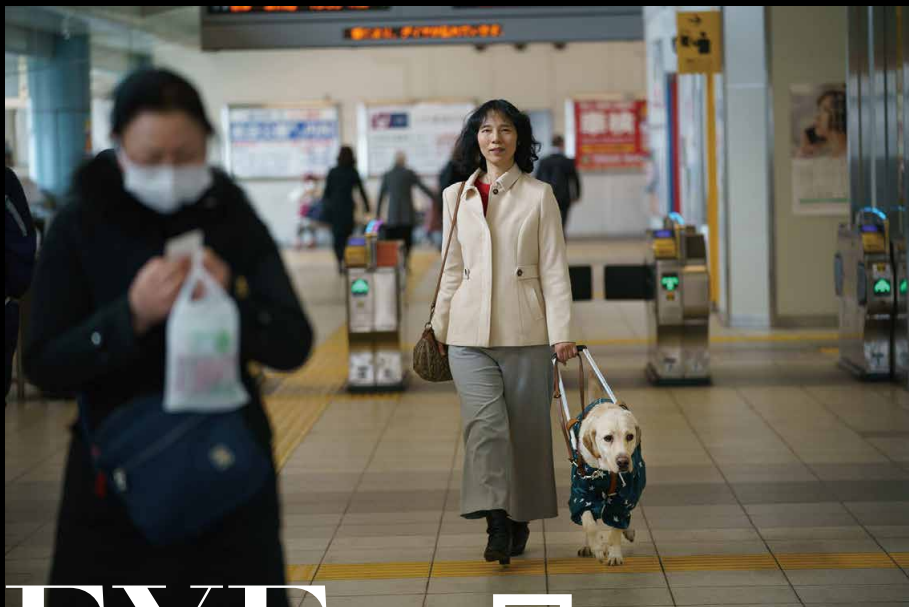


EYE は I = 私



EYE は 愛

EYEN



EYE は 目



MATE は 仲間

MATE



対
談

河相 瀏さん 塩屋 隆男 代表理事

アイメイト第1号使用者

アイメイト協会

河相 瀏（かわい・きよし）さんは、最初の国産盲導犬使用者です。1957年に国産盲導犬第1号『チャンピイ』と共に歩み始め、長年盲学校の教師として活躍。2008年まで4頭のアイメイトと歩きました。95歳を迎える今年6月、塩屋 隆男・アイメイト協会代表理事が河相さんを訪ね、65年前の思い出を語っていただきました。

チャンピイを巡る縁は「天からの恵み」

塩屋 隆男代表理事（以下 塩屋） 大変お元気そうで何よりです。河相さんがチャンピイと活躍した頃のことや、その中で印象に残ったことをお聞かせください。

河相 瀏さん（以下 河相） はい。戦後、大学生の時に視覚障害者になって、一人で歩けるようにしたい、そのために盲導犬をと考えてね。それで、あちこちに聞いた末に、アメリカ大使館の海軍武官だったノーベル大佐がシェパード犬のチャンピイを紹介してくれて、是非とも盲導犬にしたいと、もらっちゃったんです。

塩屋 河相さんのお父上は外務次官でしたよね？

河相 そうです。僕が戦争の影響で目が悪くなったことを、ノーベルさんは父を通して聞いたわけです。あの方は戦争中に駆逐艦の艦長をしていて、「日本の船も沈めた。あなたの息子が戦争に関わって目が悪くなったのなら、私にも責任の一端がある。だから盲導犬を日本で作ってくれ」と、チャンピイを下さった。

塩屋 その後、父（※アイメイト協会創設者・塩屋賢一）と出会ったわけですね。

河相 シェパード犬協会の相馬安雄さんという方が、「この人ならきっと盲導犬にしてくれるよ」と紹介してくれたのが賢一さん。初めて僕のところへみえた時に、賢一さんはチャンピイを一目見て、「こりゃ、たいした犬じゃない。目に光が無いからね」と言ったんですよ。

塩屋 見る目のないことを申し上げたようで（笑）。

河相 不思議な縁です。ノーベルさんがくれなかったら、相馬さんが塩屋さんと僕を結び付けてくれなかったら、チャンピイに能力が無かったら、国産盲導犬第1号は成立していない。これは人間が計算してもできないことで、天からの恵みだろうと思います。

国産盲導犬第1号誕生の瞬間

河相 1956年に僕は滋賀県彦根市の盲学校へ赴任して、チャンピイは塩屋愛犬学校（※当時賢一が運営していた家庭犬の訓練所）へ入った。やがて塩屋さんから手紙が来て、「チャンピイはなかなか理解力が良いからいける。期待して待ってほしい」と。

塩屋 そして1957年8月を迎えるわけですね。

河相 チャンピイの訓練が終わったとのことで、いよいよ夏休みに僕の実家があった東京の大森に帰って、歩行訓練を始めた。塩屋さんは朝8時に必ず車で練馬から来られてね。最初は塩屋さんが後ろからついて来て監督してくださった。だから私もまだ安心して、チャンピイもいつも塩屋さんを気にしているから、まだ半人前なんです。そして、2週間目くらいでした。「今日はあなた一人で池上の郵便局の本局へ行って帰って来てくれ」と。徒歩20分くらいですけど、人に何度も道を聞きながら行きました。郵便局に入ったら、チャンピイはすぐにカウンターのところへ行ってくれました。僕は1円切手を20枚買って、逆の道を帰った。家に着いたら、「これ買って来ましたよ！」って1円切手を振ってさ。待っていた塩屋さんが飛んで出て来て、そこで初めて日本に盲導犬が誕生した。手を取り合って喜びましたよ。感動的でした。

塩屋 父もすごく嬉しかったと言っていました。

彦根での活躍

塩屋 彦根では盲学校の先生をしていらした。

河相 そう、最初にチャンピイを学校に連れていった日に校長に「これが盲導犬です。一緒に毎日来てよろし

いですか？」と聞いたら、「ああ、いいよ。あなたが来たのなら来たらいい」と。そういう校長だったの。これがまた幸せだったんです。

塩屋 それはいいですね。校長先生にダメだと言われていたら、また全然違っていましたよね。

河相 いい人間関係が非常にうまく回転して、チャンピイは彦根で仕事ができたんです。学校ではふだんは職員室の机の下にいました。時々外へも出してやったのですが、また親切な同僚がいてね。彼がわざわざ立派な小屋を作ってくれたの。傘屋根の小屋でした。外の日当たりの良いところへ置くと、チャンピイはそこでゴロンと寝る。教室では、教卓の横でじっと伏せてみんなの様子を見ていました。

塩屋 ええ、教卓の写真はよく目にします。

河相 4年間彦根で暮らしたんですけど、年に1回は大雪があるんです。その大雪の日に、妻に今日はチャンピイと行くのは無理じゃないかと言われたのですが、「こういう時にこそチャンピイは能力を発揮するはずだ」と、大雪の中をチャンピイと学校へ行きました。彼は非常に巧みに雪の少ない所少ない所をずーっと誘導してくれて、無事に学校にたどり着きました。

「さすがはチャンピイだ。これが盲導犬なんだ」

河相 それから、忘れられないのはクマという犬に噛みつかれたこと。秋田のような、まあ雑種ですね。身体が大きい雄だから、いつもチャンピイに敵意を持っていたんだよね。ある朝、僕らがちょうどT字路で止まったところで、右手側からクマが自転車に引かれてやって来た。それでチャンピイとクマがこう、

塩屋 バッたり出くわしちゃったんですね。

河相 そうしたらクマが猛然と怒って、自転車を引き倒して、首輪も外れちゃった。それからチャンピイの左の腿にガブリと噛みついた。すると、チャンピイは身をよじって逆襲に出ようとした。それをやられたら大変だから、僕は「いけない！」と言ったの。そうしたら、チャンピイはこらえたんです。そのうちに町の人が出て来て、噛みついたまま離れないクマの口をこじ開けて外しました。その時にチャンピイがものすごい声で吠えた。あれは咆哮と言うんですかね。唸り声というか、吠え声というか。残念無念という、その悲しさ、悔しさがよくよく僕にも伝わってきました。本当は聞いたかったので

しょう。だけど、いけないと言われて、踏ん張ったわけですね。噛まれた脚は地面に着けないくらい痛かったのに、3本足で僕を家へ誘導してくれました。家に着いたら、妻がペニシリン軟膏を塗って治療してくれました。

塩屋 化膿止めですね。

河相 なんとか治って、また歩くようになりました。あのことだけは、永遠に忘れられない。「さすがはチャンピイだ。これが盲導犬なんだ」と。それから、残念だったことは、チャンピイの時代には盲導犬といえども電車にもバスにも乗れなかった。あれで乗っていたら……

塩屋 もっと活躍していましたね。

河相 チャンピイは、賢いだけじゃなくて非常に優しい性格でした。娘がベビーベッドで大きな声で泣いてるのを、チャンピイがそばに行って座って、どうしてそんなに泣くんだ？って、じーっと見守るんですよね。娘がハイハイするようになると、今度はチャンピイにいたずらをするのね。それでも嫌な顔一つせずにされるがままになって遊んでくれたの。塩屋さんも、チャンピイは愛犬学校にいた時も子犬を遊ばせるのがとても上手だったと言っていました。

塩屋 それは今初めて伺いました。そういういろいろなことが良い方向に向いて、その中で視力に障害のある河相さんとチャンピイが颯爽と街中を歩いている姿を見せた。そこに、大きな説得力がありましたよね。

河相 そして、使用者が「褒める」と「叱る」をしっかりと区別して心を込めて接しなかったら、犬は能力を発揮しません。やはり人間が大事です。

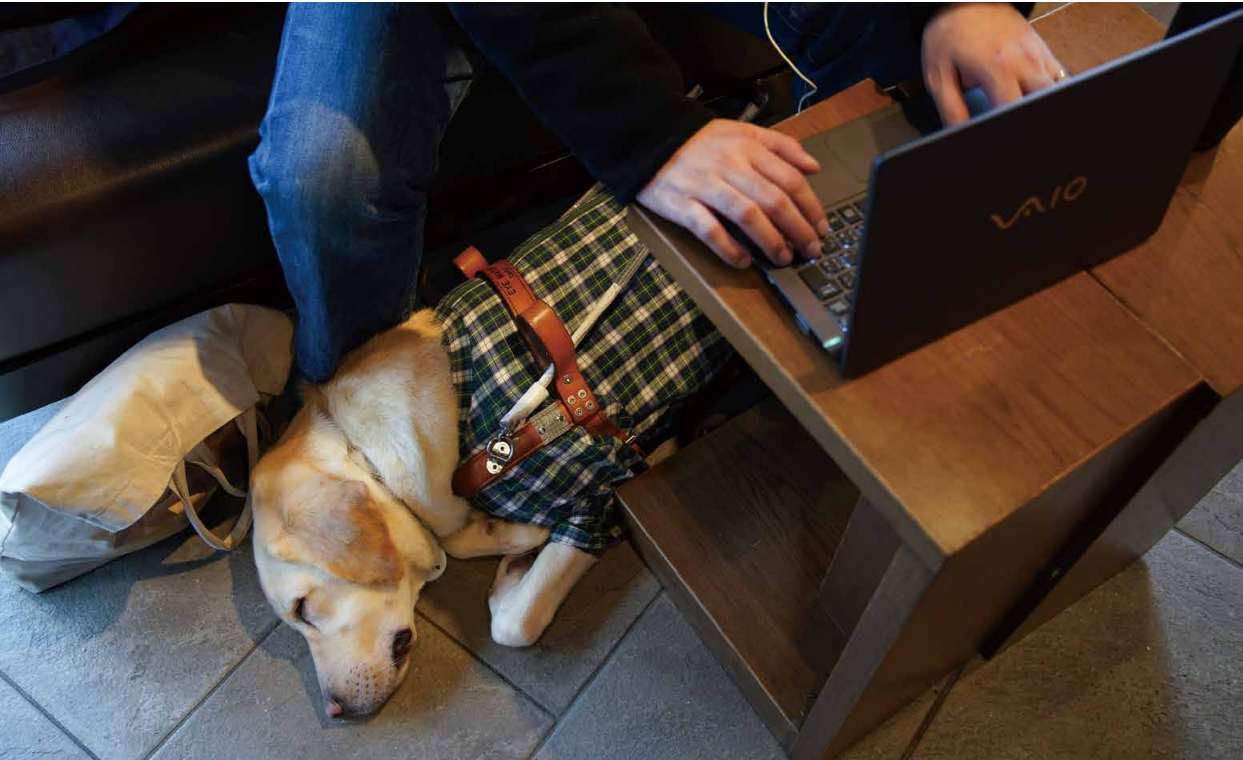
塩屋 おっしゃる通りです。今の河相さんのお言葉を是非これからもみんなに伝えていきたいです。



風を切って歩く

今を翔けるアイメイト使用者たち





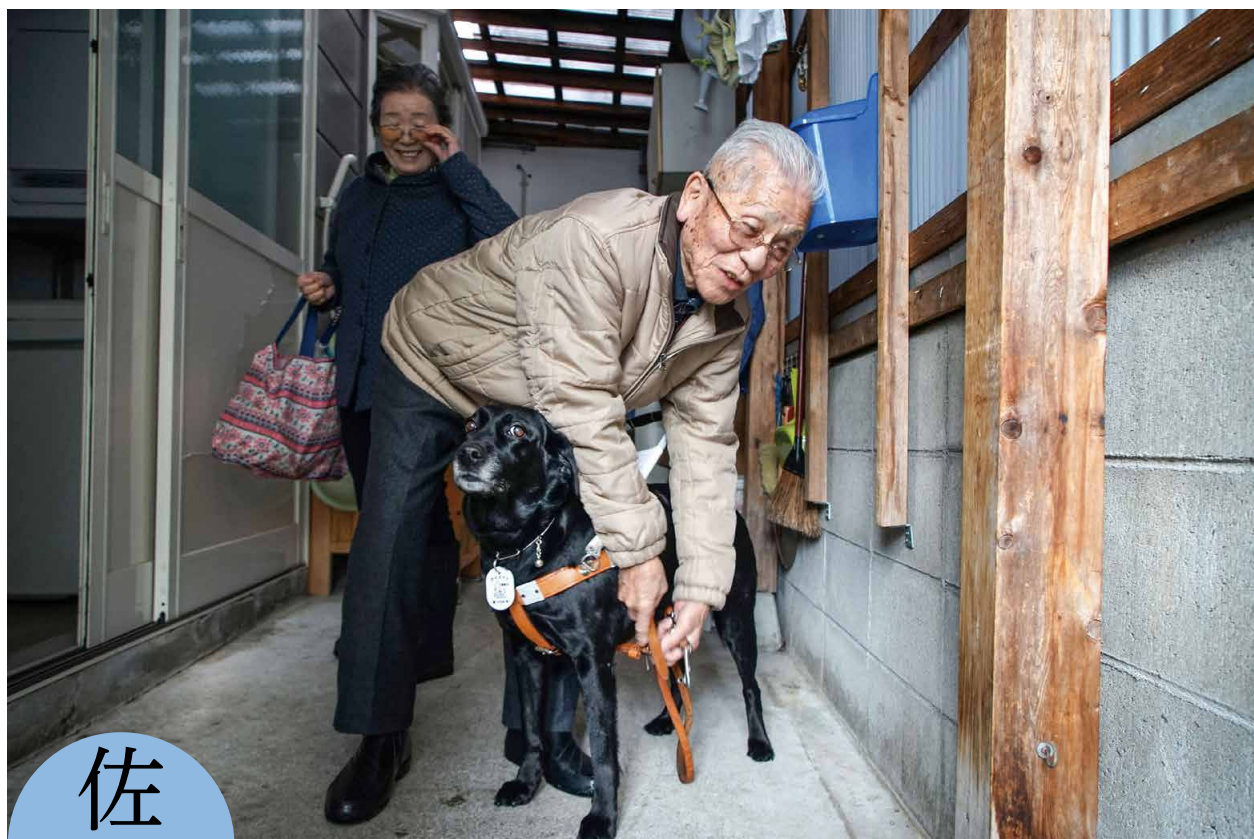
アイメイト事業の主役はなんといっても使用者です。1957年の河相渕さん以来、1400組を超える使用者とアイメイトのペアが誕生し、自立した社会生活を送っています。視覚障害者にとって、歩くことは自立への第一歩。単独歩行を実現するアイメイト歩行の爽快さを、多くの使用者が「風を切って歩く」と表現します。

積極的な人生を歩む人が多いのもアイメイト使用者の特徴です。視力を失って落ち込んでいたのが、アイメイト歩行ができるようになって一気に前向きな気持ちになったという人も少なくありません。仕事に、家族に、またある人は趣味やおしゃれをして外出することに生きがいを感じて、人生を楽しんでいます。そこに晴眼者との差はありませんし、あってはならないことです。高齢な方がスポーツなどを通じて、若い世代がインターネットを駆使してアクティブな「いま」を生きるためにも、アイメイトのサポートは不可欠です。この章では、そんなアイメイト使用者6人の「風を切って歩く」人生を紹介します。

※アイメイト協会HP「使用者インタビュー」では、本書に未掲載の方々の記事も掲載しています。
<https://www.eyemate.org/interview/>



アイメイトを社会に認めさせた もう1人のパイオニア



佐藤

憲
さん

2021年2月、近年まで最高齢のアイメイト使用者だった石川県の佐藤憲さんが88歳で亡くなった。1970年に最初のパートナーを得て、晩年まで6頭のアイメイトと歩いた。

佐藤さんは、アイメイト60年余りの歴史のうち、47年間で現役使用者として過ごしてきた。その歩みはアイメイトの歴史と共にあった。佐藤さんは使用者の立場で、公共交通機関の乗車や宿泊施設・レストランなどへの入店といったアイメイト使用者の社会参加の道を切り開いてきた重要人物の一人だ。「塩屋賢一さんはアイメイトを作る人、佐藤憲さんはアイメイトを社会に認めさせる人」というフレーズは、今もアイメイトの歴史の中で語り草になっている。

2017年に行った最後の公式インタビューで、盲人として、アイメイト使用者として力強く生きた人生を振り返ってもらい、後進へのメッセージをいただいた。

文・写真 内村コースケ（2017年1月取材）

奥様の犬への思いやりがバス乗車の先鞭をつける

佐藤さんは石川県加賀市の伝統のある温泉街、山中温泉で鍼灸マッサージ師として活躍してきた。現在は、息子さんが経営する接骨院の3階で奥様の節子さんとアイメイトとともにリタイア生活を送っている。「多い時は従業員を20名以上抱えてこの山中温泉で仕事をしていたんですよ。でも、心臓の手術を2回もしておりますね。一時はアイメイトもやめようかと思ったんですが、今ここにるのが6頭目です」。

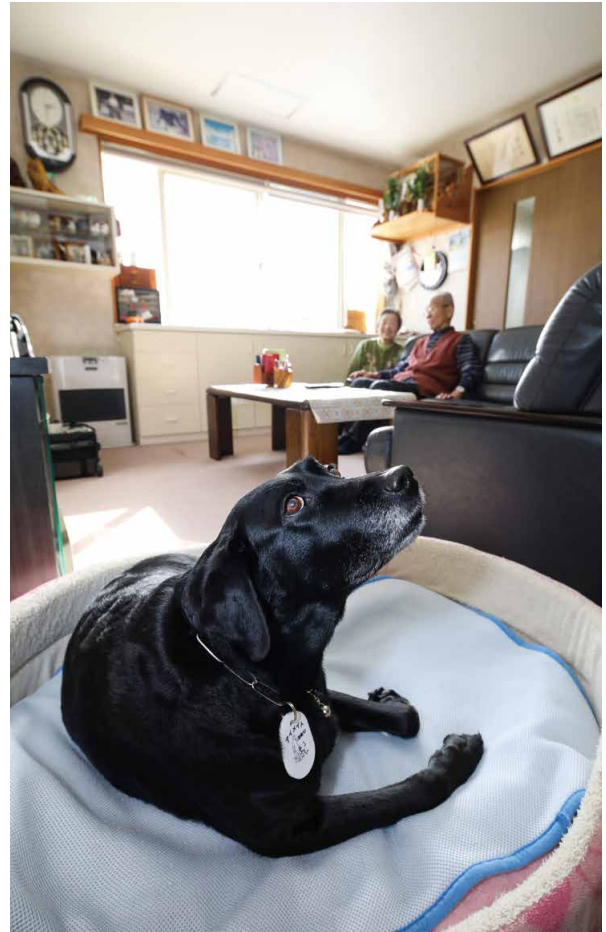
64歳の時に心筋梗塞で倒れた。それをきっかけに仕事は引退したが、アイメイト歩行は続けた。「今はもう飲まんけれど、ニトロという心臓の薬を（発作を抑えるために）持ち歩いていて時期があつてね。（アイメイトと）道を歩いて、つらくなるとポケットに手を入れて（ニトロ製剤のピンを）出すんですよ。そうするとね、アイメイトが頭でぐーっとね、私を道の隅に押していくんですよ。『休め』って」。

「本当に、犬はそういうこまーいこと（人の細かい気持ち）が分かるんです」と節子さんが続ける。もともと犬好きだったのは節子さんの方で、佐藤さんはそうでもなかったという。アイメイトのバス乗車を切り開いたきっかけも、奥様の犬に対する思いやりだった。「最初の犬をもらったのは昭和45（1970）年です。でも、練馬の塩屋さんの所から石川に戻ってきて、バスは乗せない電車は乗せない、タクシーにも乗れない。ほとんど困ったわけですが、やがて近くにもう一人使用者が誕生しましてね。その人もやっぱり乗せてもらえなかった」

その使用者は雨の日もアイメイトと歩いて通勤していた。「それを見て家内が『あの犬雨でベッタベタになって歩いとる。かわいそうに』って哀れんでね」。そして、節子さんは意を決してバス会社に出向き、「犬のためにもぜひ、その人を乗せてやってください」と、直談判した。それでも最初はダメだと言われたが、粘り強い交渉の結果、最終的にはアイメイトの乗車が認められた。

戦中戦後に盲人として生きる道を切り開く

「そうやって家内が一生懸命やったものだから、私もやらざるを得なかったわけです」と謙遜するが、奥様が先鞭をつけた社会参加の扉を押し広げたのは、他ならぬ



佐藤さん本人だ。激動の戦中戦後をハンデを背負いながら生き抜いてきた男である。自由のために自ら道を切り開く生き方は、アイメイトを得る前から佐藤さんの人生に根付いていたのだと思う。

福井県に生まれ、3歳の時にはしかが原因で失明した。父親と病院に行った際に、医者が「こうして来院し続けるのも大変だし、死亡診断書を書いてやろうか？」と言ったらしい。当時の記憶は鮮明ではないが、父親が激怒したのをよく覚えているという。「見える」とか「見えない」ということが幼い頃はよく分かっていなくて、10歳くらいになって初めて「妹や弟は学校に行くのに、なんで自分は行かないんだろう」と、周囲との違いをはっきりと認識した。

「みんな学校に行っているのに、僕はなんで行けないの？と親父に聞きましたよ。そうしたら、『お前はそこの学校とは違う素晴らしい学校に行くんだから、もうちょっと待て』言うて。弱ったなあ、と思ったけれども、少ししたら本当に福井の盲学校に入ったんです」。ところが、念願の学校へ通い始めたものの、やがて戦争が激化。昭和20年7月19日の福井大空襲の後、学校は閉鎖

された。

「それで金沢の盲学校に転校して勉強したわけですけど、終戦後の昭和25、6年ごろかな？（戦後復興のために）東京に人を増やさないといけないという時期があったんですよ」。その流れの中で上京して大学に通う決意をし、入学試験を受けたが、入学許可は得られなかった。「当時、都会はまだ食糧難でしょう。母親が『毎月（田舎から）米一斗ずつ持っていくから、入れてやってくれ』と頼んだけど、そんなことしたら警察に捕まると（笑）。結局あの戦争の、終戦のごたごたで大学には行けなかったのです」。

アイメイト協会創設者、塩屋賢一が日本で初めて育てた国産盲導犬第1号の『チャンピイ』の使用者、河相洸（かわい・きよし）さんは、ちょうど同じ頃、視覚に障害が出て通院するために、通っていた大学を休学していた。その河相さんも視力を失った後、「盲人が大学に通った前例はない」と言われ、最初は復学が認められなかったという。河相さんは粘り強い交渉の末復学を勝ち取ったが、佐藤さんのような失意もあったからこそ、後の世の中が動いたのではないだろうか。佐藤さんは大学進学を断念した後、鍼灸マッサージ師となり、東京、京都、北海道と渡り歩き、最後に高度成長期の温泉旅行ブームに沸く山中温泉（石川県加賀市）に落ち着いた。

有力政治家にも直談判

佐藤さんが最初のアイメイト、シェパード犬（当時のアイメイトは、ジャーマン・シェパードから今のラブラドル・レトリバーに切り替わりはじめる直前だった）の『アニタ』を得たのは、河相さんがチャンピイと歩き始めた13年後の1970年のことだ。盲学校の教師だった河相さんは、その当時、チャンピイの後を継いだ『ローザ』と歩んでいたが、転勤によってバス通勤になったのに伴い、チャンピイとしていたようにローザとは一緒に教壇に立てなくなっていた。日本に盲導犬が誕生して10年余り経ってもなお、バス乗車が認められていなかったからだ。

佐藤さんの奥様のバス会社への「直談判」は、そういう時代を切り開くエポックメイキングな出来事だった。そして、既に山中温泉の鍼灸マッサージ師を取りまとめる地元の名士になっていた佐藤さんは、出張先や旅行の先々でアイメイトの行儀の良さを実証しながら、公共交

通機関の乗車やホテル・レストラン・店舗などへの入店の幅を広げていった。病院へアイメイト同伴で入れるようになったのも、旅先での見舞いのためにと交渉し、実現した佐藤さんの尽力がきっかけだという。

幅広い人脈を使えたのも強みだった。地元出身の有力者らも折りに触れ、佐藤さんの頼みならと積極的に動いてくれた。その一例を佐藤さんが明かす。

「今のアイメイト協会の建物を建てる時、最初は元いた練馬から少し郊外に移転する予定だったんです。でも、『犬なんか来たらこ汚くていかん』と、（地域の）みんなに反対された。で、市長が会うというから後援会（アイメイト後援会＝協会公認のボランティア組織）の人たちと一緒に僕も行ったんです。でも、市長に言いたいことは全部言ったけれど、結局は『勘弁してほしい』と言われてしまった」

そこで、佐藤さんは当時から親しくしていた石川県出身の森喜朗元首相を訪ねた。「森さんが『そんな断ってくる所、行かんでもええやん。東京にはいくらでも地面あるが』と言うので、『本当に今すぐにあるんけ？』と返すと、当時の大蔵大臣に電話をかけ始めた。『アイメイト協会ってどこにあるんや』と聞くので『練馬の関町』



と言うと、周辺で移転先を探すと言う。2、3日後に呼び出されて再び尋ねると、5、6人（土地売却）希望者が来ていました」。不動産バブルが続いていた当時のことである。相続税を支払うために売りに出されていた土地が、練馬あたりにも結構あったのだ。

国家公安委員長、運輸大臣などを歴任した石川県出身の奥田敬和衆議院議員の大臣室を訪ねたこともあった。奥田氏は、佐藤さんとの縁がきっかけとなり、アイメイト使用者のバス乗車時の口輪装着義務の撤廃や、道路交通法に「目の見えない者は白杖または盲導犬を伴って歩く」と、盲導犬歩行を成文化するなど、アイメイト使用者の社会参加に尽力。後にはアイメイト協会の顧問も勤めた。こうしたことも、佐藤さんの訴えがなければ実現しなかったであろう。1994年11月、佐藤さんは、長年のアイメイト使用者の社会参加に対する功績を認められ、藍綬褒章を受章した。

大臣への直談判に同行したことがある塩屋隆男アイメイト協会代表理事は、「一般人は普段考えることもありませんが、国務大臣を大臣室に訪ねていくというのは、望んでもできないことです。佐藤さんは電話一本で出向きます。佐藤さんの熱意と人柄に触れると相手側がそれを受け入れざるを得ない、というところに佐藤さんの力があるといえます」と語る。

「自分のため」が「みんなのため」に

いい犬を育て、「視覚障害者の自立をお手伝いする」というのが、塩屋賢一が生前に掲げ、今もアイメイト協会に受け継がれているモットーだ。一方で、佐藤さんをはじめとする初期の使用者が、逆に協会の歩みを支えていたことはあまり知られていない。

「仕事はやめてもね、やはりアイメイトのことは気になりますよ。東京オリンピックまでに主要駅全てにホームドアをつけると点字新聞に書いてありましたね。その一方で、東京でもアイメイトのワン・ツー場所（トイレ）はほとんど整備されておらんのです。その話を森さんにしたら、『分かった』と言いました。2020年までわしは生きているか分からんけれど、『口だけで作らなかったらまた会いに行つたろう』と思って頑張っているんですかね（笑）」

佐藤さんらの努力で昔とは比べ物にならないほど改善したとはいえ、今も入店拒否や乗車拒否の事例が日常的にアイメイト使用者から報告されている。最新の調査でも、6割以上のアイメイト使用者が入店拒否などの差別的な扱いを経験していることが明らかになっている。

「自分（の周りの環境）が良くなれば他の使用者も生きやすくなるだろう、そう思ってやってきました」
6代目のアイメイトは10歳。自身の年齢を考えれば、「次はもう無理」だと笑う。次の世代が切り開かなければいけない道は、ずっと先まで続いている。



生きる情熱を支える アイメイト歩行



西山
英敏さん

長野県下諏訪町のアイメイト使用者、西山英敏さんに初めて会ったのは、2018年の真夏のことだ。僕が写真を撮影している『アイメイト・サポートカレンダー』のモデルをお願いし、下諏訪から車で1時間半ほどの山梨県内のヒマワリ畑に行った。

西山さんもパートナーのアイメイトも、共に平均よりも大柄だ。僕の25年落ちの軽四輪駆動車の助手席と一緒に収まると、ぎゅうぎゅう詰めだった。そんな劣悪な環境でも、2人とも文句一つ言わず、山梨までのドライブに付き合ってくれた。本記事の写真でも分かると思うが、西山さんはとても穏やかな風貌の持ち主だ。実際、人にもアイメイトにもとても優しく接する。僕がこれまで出会った使用者の中でも、最もよくアイメイトに話しかける人だ。その口調は愛情にあふれている。

でも、「人は見かけによらない」とはよく言ったものだ。西山さんは、穏やかで優しいばかりの人ではない。それを確信したのは撮影の帰り、一緒に食事をしながら話した時だ。アイメイトや盲導犬全体を取り巻く現状といった、少し突っ込んだ話になると、口調は穏やかながら、西山さんの考えや言葉の端々には、高い熱量が秘められていた。

そんな西山さんは、「アイメイトを信用できるようになってから、やっと人を信用できるようになった」と言う。その言葉の裏には、強い感受性と熱い心を持つが故の、壮絶なストーリーが秘められていた。

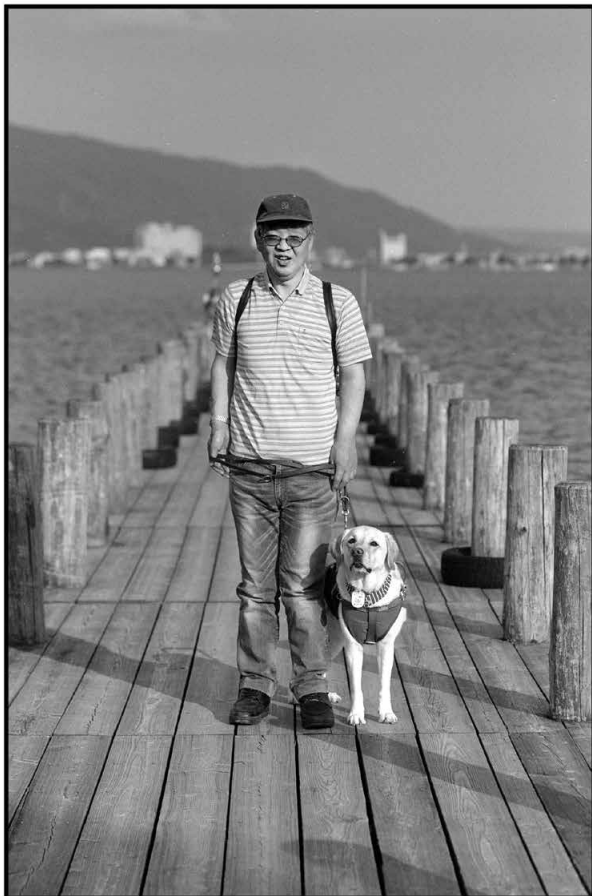
文・写真 内村コースケ（2019年6月取材）

絶望して町をさまよう

冬は凍結して「御神渡し※」が出現する諏訪湖の湖畔で生まれ育った西山さんは、画家かイラストレーターになるのが夢だった。小学生の頃から水彩で風景画や大好きな動物を描いていたが、中学に入った頃から見えにくくなった。

「だんだんと悪くなって、やがてデッサンに使う4Bの鉛筆の線が分からなくなってきて、もっと濃い8Bという鉛筆で描き始めたのですが、それも分からなくなってコンテを使い始めた。そして、そのコンテの線も見えなくなった時に、もうどうしていいか分からなくなって、フラッと家を出たんです」

絵にのめり込んだのには、訳があった。幼少時から、多発性骨軟骨腫という病気の影響で正座やスキップが苦手だった。そのことで周りにいじめられ、昨日まで仲が良かった友人にまで離れ立てられたこともあった。「集団の中では、小さな違いをチクチクと突かれるんですよ。それで人間嫌いになっちゃって、絵やスケッチの方に入り込んだんです。動物の絵は得意だったけれど、人間は描けなかったな」。



その絵すらも描けなくなったのだから、絶望は深かった。フラッと家を出たのは、完全に光を失った14歳の時。発作的に自殺場所を求めて町をさまよった。「家を出た後のことはほとんど覚えていない」というほど精神的に追い詰められていた。気がついた時には、救急車の中。後から分かったことだが、早朝の町を5時間ほど歩き回った末に、崖から落ちて気を失った。皮肉なことに、いじめの原因となった病気によって発達した軟骨がショックを和らげ、一命をとりとめたらしい。家族に思い切り泣かれたのを目の当たりにし、かろうじて我に返った。

※「御神渡し」＝おみわたり。厳しい寒さと寒暖差によって湖面にできる冬の諏訪湖特有の氷の筋。これを神様の足跡だとする民間信仰がある。

目立たない存在から自己主張できる性格に

高校進学タイミングでの中途失明。盲学校に進む前に白杖歩行の特訓を受けたが、指導の先生はスパルタだった。たった10分基本を教えられただけで、路上に放り出された。「普通はその段階で泣いちゃうか、ぶんむくれて投げ出すか。でも、僕はケンカしたんですよ。『10分（白杖を）振ったくらいで上手にできたら苦労しないよ!』と、思い切り怒鳴りました。今にして思えば、そうやって怒らせるのが先生の手だったのじゃないか」。

後から他の先生を通じて、「あれだけ喧嘩腰になれるガッツがあれば、ものになるかもしれない」と、白杖の先生が言っていたと聞かされた。中学までのあだ名は目立たない存在だから「壁の染み」。一方、高校では「瞬間湯沸かし器」だった。失明して自分をさらけ出す必要に迫られ、内に秘めた強い性格が表に出たのだ。

白杖歩行は、そうやって厳しく仕込まれた結果、技術的には問題なくできるようになった。でも、多発性骨軟骨腫の影響で手首に力が入らないため、30分、1時間と白杖を振ると腱鞘炎のような痛みが襲った。歩行手段として、とても自分には合わない。「杖を使わないで歩く方法はあるかな、と考えると、まずヘルパーさんが浮かびました。でも、それって一人で歩くことにはならないよな、と疑問に思いました。それで、あ、盲導犬なら杖がいらない。自分でも歩けるんじゃないかな、と。動物好きな自分にぴったりにかもしれない。一筋の光が差した気がした。

犬を全身で抱きとめて流した涙

高校を卒業して、盲学校の高等部で鍼灸マッサージ師の資格を取った頃には点字もすっかりマスターしていた。「マッサージ師として少しは稼げるめどが立てば、あと足りないものはやっぱり歩行ですよ。中途失明者だとなおさら『歩きたいけれど歩けない』というストレスがたまる」。下諏訪には当時、ベテランの女性アイメイト使用者がいた。西山さんは子供の頃、ラブラドル・レトリバーに切り替わる前の、その女性のジャーマン・シェパードのアイメイトを見かけたことがあった。

女性を訪ねてアイメイトを持ちたいと言うと、協会に連絡を取ってくれ、塩屋隆男・現代表理事が諏訪まで来て面接してくれることになった。一方、学校の先生たちは、「足に障害があるのに、（アイメイトと）長い間歩いたりしたらどうなるか分からない。せっかく資格も取れたのに足を壊したらどうするんだ」と反対した。「考え直さないか」と翻意を迫られたが、西山さんは「先生、僕、もっと歩きたい!」と強く訴えた。

家族と先輩使用者の女性は応援団だった。ただ、先輩使用者は、入店拒否などのマイナス面もあること、そして、「歩行指導は厳しいけれど、自分で決めたことだから途中で投げ出すことはできない」と、現実もしっかり伝えた。最初の歩行指導はその言葉通り厳しく辛いものだった。「犬の扱い方が分からないし、当然犬は言うこ

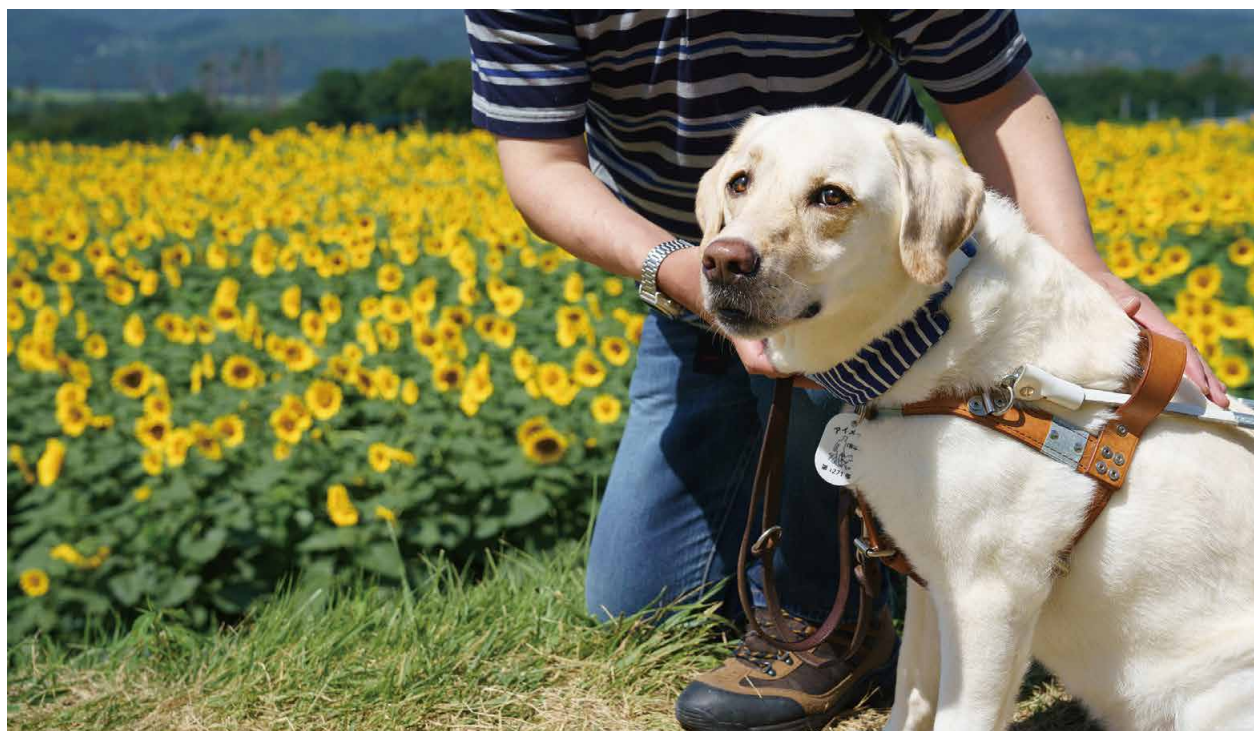
とをきいてくれない。最初の2週間はさんざんでした」と、西山さんは振り返る。

担当歩行指導員には、体に限界が来たら休んでもいいと言われていたが、意地でも卒業する覚悟だった西山さんは、膝が痛くても構わず訓練を続けた。最初の単独歩行の試験では、ライトコーナーの指示を出すべきところを、反対のレフトにしまい、犬をパニックにさせてしまった。「それで犬が歩道から出そうになったので、飛び出ないように全身で抱きとめて…。あの時は本当に泣きながら帰った記憶があります」。それでも、「皆が4週間で卒業するところを、自分は6週間かかっていい」と鷹揚に構えることでその後の課題は落ち着いてクリア。無事通常の4週間で卒業することができた。

アイメイトと北海道、九州にも

1頭目のアイメイト『シンシア』と下諏訪へ帰って来ると、やはり実際の生活の場でのアイメイト歩行はだいぶ趣が異なっていた。「歩道が途中で切れちゃって犬が混乱するようなこともあって、自分の頭の中にしっかり地図を描けるようにならないとまずいぞ、と。『確かあそこは白線だけで歩道を区別しているから危険だったな』とか、シンシアと実際に歩きながら昔のあらゆる記憶を呼び戻しました」。

そんな初期の頃は、後ろからお母さんがこっそりつい



てきていた。「そりゃあ、人の気配くらいは分かりますよ。でも、こっちも知っていて黙っていました。『アイメイトは、犬は犬だけど特別な犬なんだ』と分かってもらうには、実際に見せるしかないですから」。お母さんは、最初は駅までついてきたが、やがて駅までの道のりの中間点で帰るようになり、家を出て最初の角まで見送るだけになり、最後には全く見守りに出てこなくなった。「そうやって犬と一緒に信用を積んで、自分の中でも、もう一人でどこに行ってもいいよな、と自信をつけました」。

シンシアとは北海道旅行にも行った。九州旅行では、ちゃんぽんを食べようと長崎に立ち寄ったが、立て続けに入店拒否された苦い思い出もある。「確か3店舗断られたかな。犬のしっぽがだんだん下がってくるんですよ。自分のせいで断られているのが分かるから。『大丈夫、大丈夫、ここまで来たらもう1軒回っちゃおう。駄目だったらコンビニを探しておにぎり買おうね』って、励まし励まされて、4店目でなんとか食べられました。おいしかったなあ」。

現在のアイメイトが5頭目。30年間アイメイト歩行を続けてきた。自分が元気な限りギリギリまでアイメイト歩行を続けようと思っている。

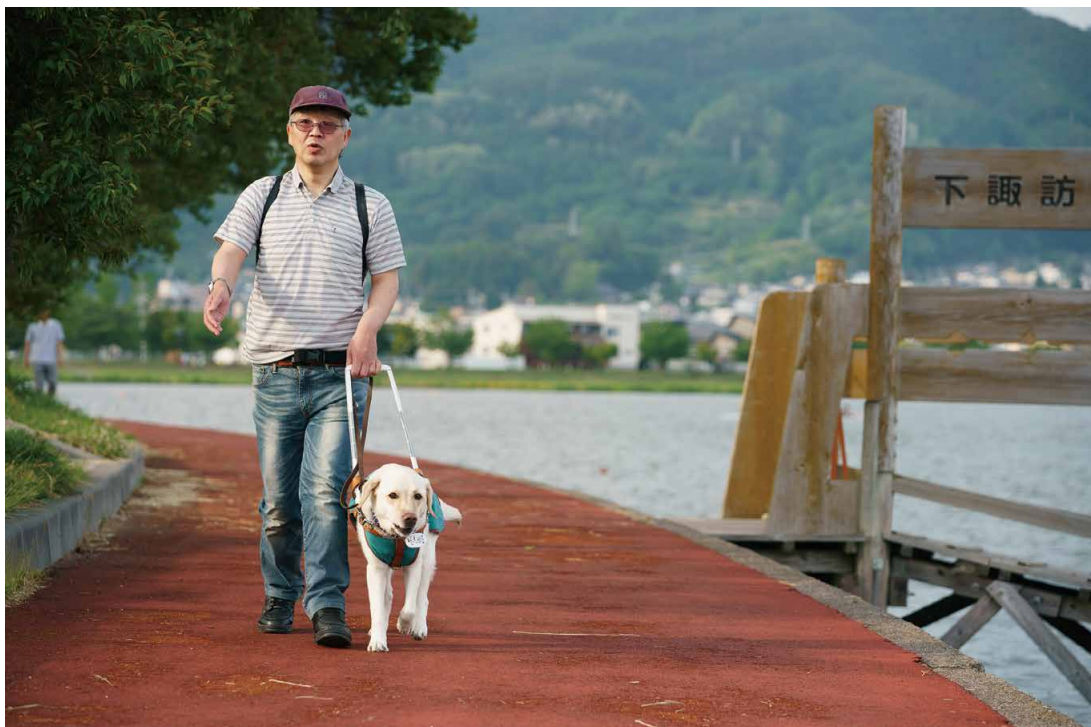
「左足元に犬1匹分の温かさがあると、スーパーマンじゃないけれど、なんでもできるような感覚になる。不思議ですよ。それもアイメイトのオマケなのかな、うん」

人を愛するがゆえに犬を信じ、人を信じる

取材の最後に、西山さんはアイメイトを持ったもう一つの理由を明かしてくれた。自分と同じく全盲で、姉のような存在の片思いの女性がいた。「デートするのに親やヘルパーさん同伴では恰好がつかないな、というのがありましたね。今から思うと、必死になって犬と歩けるようになりたいと思ったのは、僕が一人で動けるようになったら、少しはその人をどこかへ連れていけるかな、お茶を飲みに行ったりできるかな、と思ったからかもしれません」。

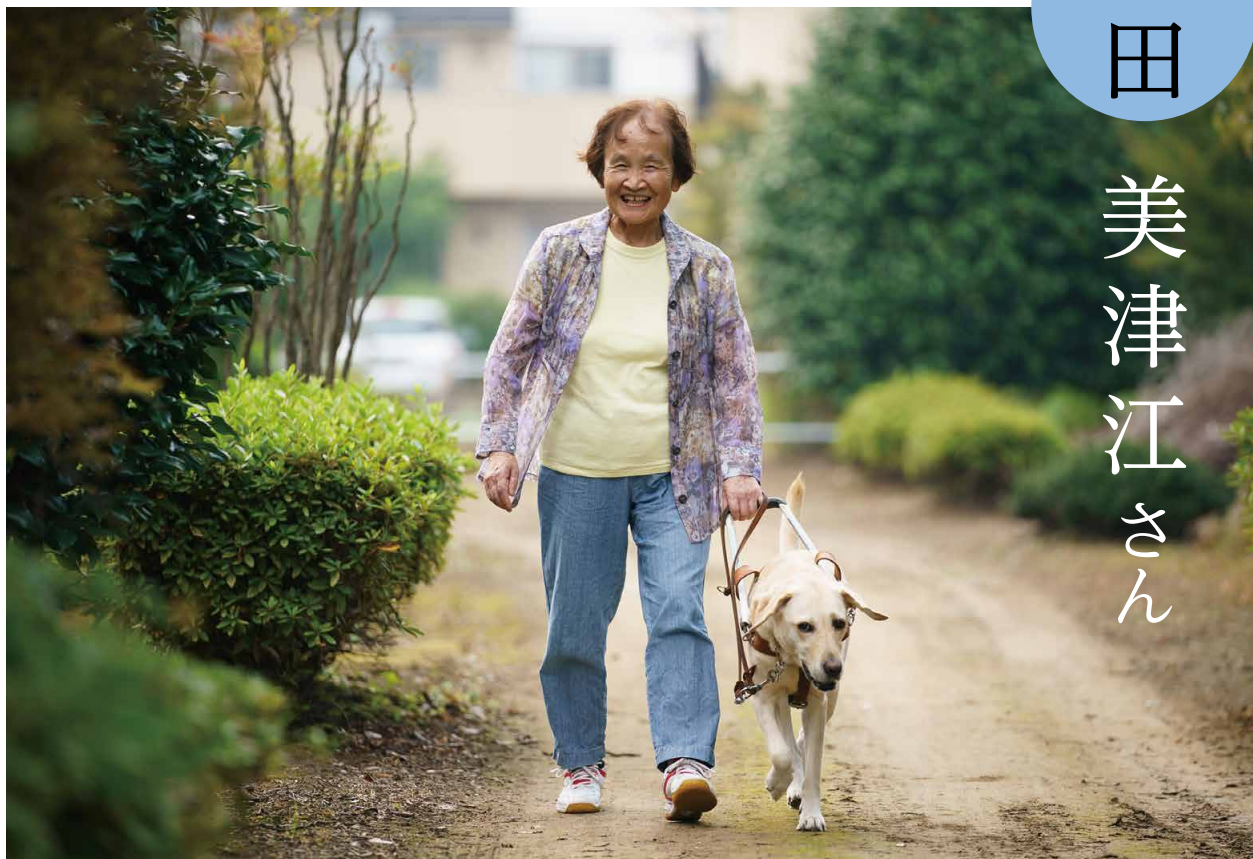
その女性は昨年、西山さんの誕生日に亡くなった。アイメイトと共に、一緒にコンサートに行ったのが人生で最も美しい思い出。心無いいじめのせいで人を嫌いになった少年が、人を好きになって犬と歩き始めた。これほど愛と情熱に満ちた話は、そうそうあるものではない。

「子供の頃は、人間付き合いに疲れて壁を作っていました。それが自分を守る手段だと思っていました。アイメイトと歩くようになると、犬を完全に信用しないといけないんです。信じきれない犬に命なんて預けられないから。ということは、その犬を育てた指導員さんたちを信用しているということ。人間もまだ捨てたもんじゃないな、だったら信じてもいいかな、と変わりました。だから、今の僕しか知らない人は、元は人間嫌いだったと言うと信じられないでしょうね(笑)」



「なんでも自分でやりたい」と 歩き続けた50年

吉田
美津江さん



視覚障害者が人の手を借りないで、アイメイトや白杖の助けだけで歩くことを単独歩行と言う。多くの視覚障害者が、「一人でどこへでも出かけられるようになれば自立した生活が送れる」と語る。つまり、アイメイトを持つ目的は、自立のためにほかならない。

ところが、近年は盲導犬を連れながら同時にガイドヘルパーも頼んで外出する人が増えているという。ガイドヘルパーの同行援護を頼みやすくなった時代背景もあるし、個別の事情もある。犬がいながら単独歩行をしないからといって、一概に批判することはできないだろう。

とはいえ、他の盲導犬育成団体では必ずしも単独歩行を目的としない場合がある一方、アイメイト協会の歩行指導はあくまで単独歩行の実現を目指している。しかし、そのアイメイト使用者の意識も変わってきていると指摘する関係者は少なくない。たとえば、ベテラン使用者の吉田美津江さんはこう嘆く。「自分が一人で歩きたくて犬（アイメイト）を選んだのでしょうか？それなのに、犬がいるうえにガイドヘルパーさんがついてる人が最近は増えた。そんなのでいいの？と思います」。吉田さんは75歳の今も、6頭目のアイメイトと単独歩行を続けている。

文・写真 内村コースケ（2020年8月取材）

生涯現役のスポーツウーマン

東京・多摩地区にある障害者スポーツセンター。吉田さんは、週に1回ほど、ここでブラインドテニスに汗を流す。中に鈴が入ったボールを、音を頼りに追う。他の仲間たちは弱視や晴眼者。全盲の吉田さんはその中で、自分より若い人たちや男性たちと対等に渡り合う。

もともと運動は得意だ。若い頃には、ソフトボール投げで全国障害者スポーツ大会に出場したこともある。見えなくなってからも、陸上、登山、乗馬、ダイビングと、さまざまなスポーツに挑戦した。最近になって初めて車の運転にもチャレンジした。「サーキットで視覚障害者の運転ツアーがあるんですよ。今年はコロナで中止になってしまったけれど、その前には3回連続で行きました。面白かったですよ〜」。まだ視力があった10代の頃には、兄のオートバイを借りて町中を走ったこともあったという。いわゆるおてんば娘だった。

終戦直後の1945年10月、茨城県の農家に生まれた。4人兄弟の3番目。幼い頃から夜盲の症状を自覚していたが、戦後の混乱期のこと。地元の病院に行っても、栄養不足だと肝油を飲まされただけだった。「水戸の大きな病院では網膜症とか言われて。でも、結局詳しいことは分からなかったのよ」。網膜色素変性症という難病で、やがて視力を失うことが分かったのは、叔父のついでで東大病院で検査を受けた高校3年生の時だった。高校へは自転車で通っていたくらいだから、本人にしてみれば青天の霹靂だった。

18歳で盲学校へ

「それが18の時でしょう。10年くらいで完全に見えなくなるから、今のうちに盲学校へ行きなさいと先生に



勧められました」。その場で叔父が教育大学附属盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）への進学を決めた。学校へ問い合わせると、ちょうど新しい科ができるので、4月からすぐに来なさいと言われた。「あれよあれよという間に話が進んだから、見えなくなったらどうしよう、と悩む暇もなかったんですよ」と吉田さん。実家を離れて、学校の寮に入った。

「それまでに全然知らない世界でした。みんな杖をついて歩いていたり、杖を持っていない人も見えないふうだけどシャッシャッと歩いていたり、人につかまって歩いていたり。それに、人の目を見て話さない。声だけでお互いにコミュニケーションを取っている。それが不思議で不思議だね」

吉田さんが入ったのは、鍼灸マッサージ師の資格を取るための「二部専科」というコース。高校まで一般の学校に通っていた人たちが集まっていて、社会人経験者もいた。7人の同期生の中で最年少。その一人が1歳上のご主人、勇さんだ。「(歳下で) かわいがられていたというよりは、うるさくてね。おしゃべりでした」と、吉田さんは当時の自分を思い出して笑う。「まあ、にぎやかな方だったね」と、寡黙なタイプの勇さんも頷く。日本中が東京オリンピックに湧いていた青春時代。吉田さんもスポーツに熱中した。



「僕はその人の意欲を買うんだよ」

卒業して間もなく勇さんと結婚。1年後に一人息子を授かった。病院勤務の勇さんは仕事の虫。家庭のことは妻に任せるといふ、昭和の男だ。一方、吉田さんは自分のことはなんでも自分でしたいというタイプ。そんな二人だからこそ、気が合うのだろう。

「見えなくなつて、私は主婦だから。買い物から料理、子育てまで全部自分でやらないと気が済まない。人にやってもらったとしても、後から点検するほどです(笑)。親を早くに亡くしたからかもしれないけれど、そうねえ。4人兄弟で私が一番きかん坊かもしれませんね」

「子育てと家事のためにアイメイトを持った?」と聞くと、吉田さんは必ずしもそうではないと言った。それ以前に、持ち前の性格から、なんでも自分でする=自立することが人生の大前提だった。テレビのドキュメンタリー番組で盲導犬の存在を知り、1972年、ちょうどお子さんが幼稚園に上がる頃に、アイメイト協会(当時は東京盲導犬協会)の創設者、塩屋賢一を訪ねた。「でもね、当時東京都は就労者しか駄目だったの。私主婦でしょ?でも、絶対に自分のことは自分でしたいって、塩屋先生に訴えたの」。当時は、自治体によっては主婦などの非就労者は、盲導犬の助成金給付事業の対象外だったという。

「そうやって、とにかく一人で歩きたいと一生懸命頼んだら、塩屋先生は『僕はその人の意欲を買うんだよ』って言ってくださいました。色々取り計らってくれたようで、半年後くらいに歩行指導を受けることができたんです」。その頃には、吉田さんの視力は視野が極端に狭まり、歩道の白線がごくわずかに見える程度。白杖歩行の経験もないまま、最初の2週間は半日ほどかけて当時吉祥寺にあった協会まで、徒歩と電車とバスで一人で通った。

当時の塩屋賢一の印象を聞くと、吉田さんは「おっかない先生でした」と笑顔で答えた。「もうね、雰囲気は怖いんですよ。心の中をみんな見透かされているようで」。だから、ごまかしや嘘は絶対に通じない。当時は部下の指導員たちが一斉に夜逃げのような形で退職した苦難の時代。正規の指導員がおらず、賢一が一人で生徒と見習いの職員の指導をしていた。「見習いが4人くらいいたかな。みんなメモを取りながら先生の話の聞くんだけど、先生は『それはさっき言っただろう!』『お前

聞いてんのか!』ってね。今の隆男さん(現・代表理事。賢一の長男)と声がそっくりでしたよ」。

一方で、賢一の温かさに触れる機会も多かった。「苦勞して町を(候補犬と一緒に)歩いて帰ってくるとね、必ず先生が玄関にいるの。『お疲れさま』って言って」。人に対しても犬に対しても、よく出来た時には褒めることを忘れなかった。

「塩屋先生は優しい時は優しいんですよ。犬には『いい子だな、お前』って人間の子供に言い聞かせるみたいにするのね。ベタベタはしない。『本当に犬が大好きな人はあんなんだ』と思いました」

歴代のアイメイトたちと道を切り開く

1頭目のアイメイトは、『クナ』というジャーマン・シェパード。1972年に誕生した91組目のアイメイトペアだ。クナの初仕事は買い物だった。幼稚園児の息子さんの手を引いて、バス通りの坂を10分ほど下った所にあった食料品店へ行った。「これまでは夫がやっていたことを、絶対絶対、自分でやるんだと。それは嬉しかったですよ」。

とはいえ、盲導犬の認知度がまだまだ低い時代。町の人がそばに寄ってきて「なんだこれ?噛み付くか?」な



どと言われることもしばしばだった。「幼稚園も最初はダメでした。『犬が嫌いな子供もいるから』と。そうではない子は、『わーっ、犬だ!』としっぽを捕まえたりする。先生たちが心配してね。でも、『この子は大丈夫だから』と通い続けて分かってもらったの」。やがて、クナが「目の仲間＝アイメイト」として仕事をしていることが浸透し、先生たちが「吉田くんのおばちゃんが連れてくる犬を触っちゃだめよ」と、自然に子どもたちに言い聞かせるようになった。

しかし、小学校へ上がるとまた一からやり直した。校庭までなら入っていいと言われたものの、親が小学校へ行く用事といえばPTAの集まりや授業参観。校舎に入れば意味がない。やがて、困っていることを聞きつけた塩屋賢一が学校に来てアイメイト使用者の社会参加の必要性を説明してくれた。それでようやく校舎に入れるようになったが、すぐに引っ越し。幸い、転校先の小学校では担任に理解があり、同じ苦労をする必要はなかった。昭和の頃は法律が整っておらず、まだまだ個人個人の裁量に左右される時代だった。

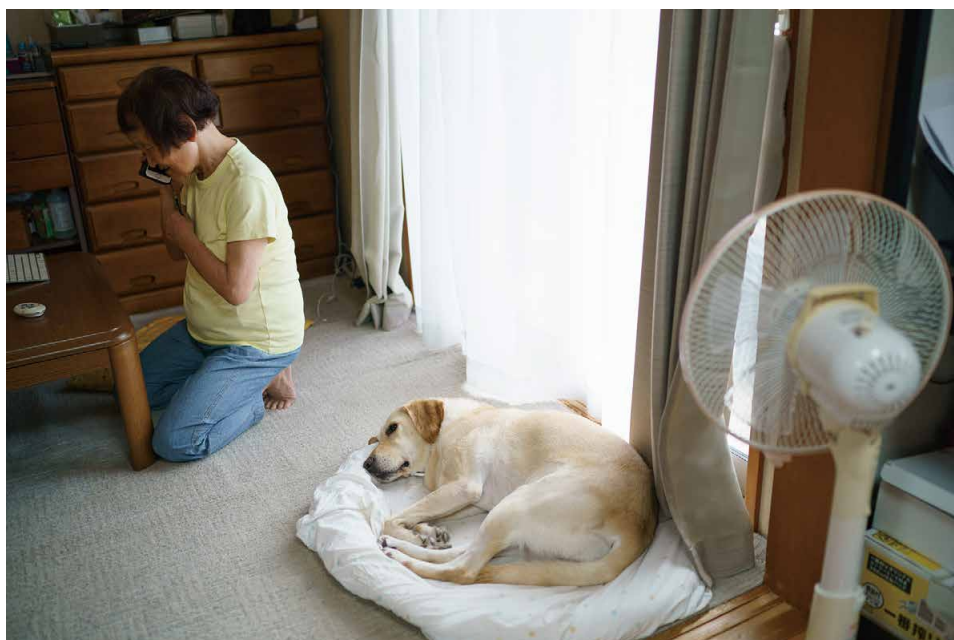
当の息子さんは、歴代のアイメイトと大の仲良し。3代目の黒シェパードの『プロディア』とは、同じベッドで寝るほどだった。大学生になった息子さんを朝起こすのも、プロディアの仕事だった。「もちろん、ハーネスをつけるとビシッと仕事をします。でも、黒いシェパードはみんなに怖がられてね。ラブに切り替わっていったのは、周囲の反応という理由が一番大きかったのだと思います」。

「自分で行動できなければ何事もできない」

今日まで、子育てからスポーツ、海外旅行、パソコンまでなんでも自分でやってきた吉田さん。「マッサージの仕事をしている視覚障害者の多くは、コロナで仕事がなくなって困っています。(視覚障害者団体が)補償しろと一生懸命運動していますね。その一方で、歩けないことに対してはどうしようもない。最近は盲導犬使用者でもヘルパーさんに頼る人が増えていますが、今は濃厚接触になるからと断られるケースが多いと聞きます。だからね、やっぱり自分で行動できないと何事もできないと思うんです。コロナ前は、一人でアイメイトと駅前に立っていたりすると声をかけてくださる方が大勢いましたが、今は誰も声をかけてきませんしね」。

コロナだけではない。世の中が厳しくなれば人々の心は荒み、いままであった他人の親切が当てにならなくなることもある。社会の助け合いの精神は大切だし、皆がお互いに支え合う社会であってほしい。だが、その基礎には個人個人の「自立心」がある。吉田さんは視力を失ってからも、半世紀にわたって高い自立心を持ってアイメイトと歩み続けている。

「盲導犬使用者の集まりで、ある人が排便させたら、ヘルパーさんが飛んで来て、そのワンコちゃんのツーツを拾ってるんですよ。塩屋先生の言う犬をコントロールしていない、犬に連れられているという状態ですね。塩屋先生のミーティングに耳を傾けていた昔の人はみんな、自分でなんでもやるものだと思っていましたよ」



家族愛に支えられて



生田
明美
さん

アイメイト使用者となるには、アイメイト協会で4週間の歩行指導を受けなければならない。それぞれの使用者にその思い出や苦労があるが、晴れてアイメイト使用者となった後の「戦いの歴史」もまた、積み重ねられている。

現在では、補助犬法や障害者差別解消法によって、アイメイト・盲導犬の存在を理由に乗車や入店を断ってはならないとされている。しかし、日本の盲導犬の歴史が始まってから半世紀以上経った今も、この社会全体のルールが末端まで浸透しているとは言い難い。

2年前（※取材時）にアイメイト使用者となった千葉県船橋市の生田明美さんも、「アイメイトを得て意気揚々と帰宅したその日から葛藤が始まった」と振り返る一人だ。アイメイト同伴で娘の保育園、タクシー、飲食店などに入るのに、予想外の苦労があったからだ。それを乗り越える秘訣は、肩肘を張った戦いではなく「家族愛」だった。

文・写真 内村コースケ（2018年12月取材）

子供の送迎のために

生田さんは、ご主人の健一さんと自宅で鍼灸治療院を経営。小学校4年生の長男と保育園児の長女がいて、弱視で白杖使用者の健一さんと協力して仕事と子育てをしている。アイメイトを得るまでは、ガイドヘルパーの同行援護もよく利用していた。

「ただ、ヘルパーさんをお願いする場合は、子供を連れて行ってはいけなくなっています。例えば、子供を病院に連れていく際にヘルパーさんをお願いしようとすると、保険の問題でできない、責任が取れないからできないと、断られます」。視覚障害者の援助はできても、子供の世話は業務の対象外という理屈だろうか。自治体によって対応が違うようだが、制度の不十分さと責任回避体質が見え隠れする。

生田さんは、知り合いにアイメイト使用者がいたため、アイメイトがいれば単独歩行ができ、子供の送迎も自分でできるようになることは知っていた。協会に見学に行くとすぐにでもアイメイトを持ちたいという気持ちになり、下の娘が3歳になるのを待って歩行指導を受けた。「白杖でも、保育園への送り迎えなどはなんとかできていましたが、逆に『子供に連れて行ってもらう』という感じでした。やはりアイメイトがいれば、自分が責任を持って送迎などができると思いました」。

成人後に失明

小学校1年生の時から、ぶどう膜炎（目の中に炎症が起きる病気）により、緑内障や白内障が出て、見えにくくなった。成人したころから白杖を使うようになったが、それまでは視覚障害者だという自覚はあまりなかった。黒板の文字がほとんど見えない状態だったが、「私は普通の人と同じだ」と、普通学級で過ごしてきた。

「20歳の時に、眼内レンズを埋め込む手術をしました。その直後は1.0くらいまで見えて、『すごい！なにこの世界！』って。あっと言う間に下がっちゃったんですが、そういう“見える世界”を一度経験しているんです」

だが、手術から10年後の2006年に失明。翌年に本格的な白杖歩行の指導を受けた。「でも、白杖って怖くて。歩く速度も遅いし。やっぱりヘルパーさんがいた方が楽なので、(移動の)ほとんどはヘルパーさんか、旦那



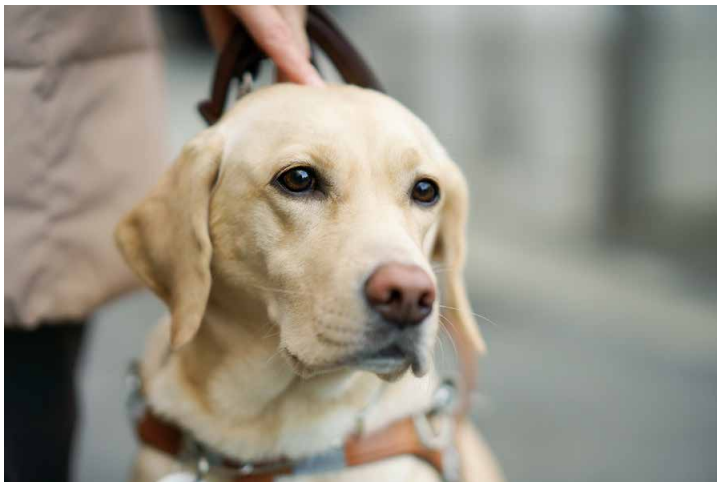
さんか、子供たちに連れて行ってもらう感じでしたね」。

アイメイトがいる今は、年に1、2回しかガイドヘルパーを頼まなくなった。「全く知らない所に行くときは、地図が（頭に）入っていないのでお願いします。右後ろにいてもらって、周りの状況や道順を教えてください。それ以外は頼ることはありません」。

保育園やタクシーで……

アイメイト協会での歩行指導合宿は、比較的スムーズに卒業することができた。最初は指示を出しても犬が全く動かないという苦労もあったが、信頼関係が醸成されるのにそれほど長い時間はかからなかった。明るく前向きな性格と、実家で犬を飼っていてもともと犬が好きだったのもプラスに働いたのだろう。2016年6月に、晴れてアイメイト使用者となった。

「これからは誰の力も借りずに自由に外出ができるんだ」と、大きな期待を胸に協会を後にした。しかし、自宅に帰ったその日から、新たな葛藤が始まった。「さっそく保育園に娘を迎えに行ったのですが、玄関から先へはアイメイトは入れてもらえなかったのです」。表向き



「現場」と「本社」の温度差

最近の乗車拒否や入店拒否の顛末は、たいてい次のような形を取る。まず、現場の人が「盲導犬の存在を理由に乗車・入店・入場を拒否してはならない」という社会のルールを知らないため、「衛生上問題がある」「お客様自身に何かあってはいけない」「犬が苦手な方もいらっしゃいますので」などと頑なに断る。それに対し、使用者や家族が、その裏付けとなっている補助犬法や

障害者差別解消法について説明すると、店の奥に引っ込んだり、上司に電話をかけた末に、渋々認める。

生田さんの戦いの中には、事実上入店拒否が続いているケースもある。アイメイトを迎える前から行っていた日帰り温泉施設だ。初めてアイメイトと行くと、「(犬の) 待機スペースがない」と入場を断られた。市役所を通じて交渉すると、今度は「うちには(盲導犬受け入れの) ガイドラインがない」という回答。アイメイトが清潔で人に危害を決して加えないことや法律の説明をすると、ようやく本社の社員と市役所の職員立ち会いのもと、待機スペースを検討することになった。ところが、「ここなら」と提案された場所は資材が山と積まれた物置兼ボイラー室。とてもアイメイトを安心して待たせられる場所ではなかったが、「衛生的に問題があるので他の場所には入れられない」とのことで、今に至るまで交渉はストップしている。

の理由は、子供たちがアイメイトを見てはしゃいだり触ったり、他の保護者との間で何かあったら生田さんたちの方が困るだろう、というものだった。「多分、言い訳です。他でもだいたいそうなんですよ」。あたかもアイメイト使用者側を心配しているような言い方は、入店拒否や乗車拒否の典型的な対応だ。「(あなたのことが) 心配なんですよー、ってだいたい言うんです。でも、(本心は) 多分、嫌なんだと思います。何かあった時に」。

補助犬法などについて説明しても、保育園の現場の人たちはなかなか分かってくれなかった。それでも、上層部につないでくれただけ良かった。交渉の結果、最終的には「お母さんが大丈夫でしたら良いですよ」ということで、アイメイト同伴で教室まで入れるようになった。

タクシーの乗車拒否にも2度遭った。どちらも同様のパターンだ。「最初はドアを開けてくれるんですよ。でも、犬を見た瞬間に閉めるんですよ。旦那さんが抗議しなかったら、そのまま走り去ったでしょうね」。理由を聞くと、「犬はダメなんだ」と予想通りの返答。盲導犬だと説明すると渋々乗せてくれたが、「嫌だけど特別に乗せてやる」と言わんばかりの態度で、決して自分の非や無知を認めようとししない。後に市役所の相談窓口を通じてタクシー会社にそうした対応を改めるよう申し入れると、「普通の犬かと思った」「犬かどうか分からなかった」「ハーネスを持っているのが見えなかった」と言い訳が二転三転。「以前盲導犬に乗せた時に毛がついて嫌な思いをした」「臭かった」などと侮蔑的な言葉もあった。





「一人で頑張るのはやめにしよう」

こうした社会の壁に何度もぶつかるうちに、明るい生田さんもさすがに落ち込んでしまった。「何のためにアイメイトをもらったのだろう？これじゃあ、以前のようにガイドヘルパーさんや家族に頼って出かけた方がましだよ」と毎日のように悩み、体調も崩してしまった。

「でも、半年ほど経ったころでしょうか。『もう一人で頑張るのはやめにしよう』と思うことで、アイメイト歩行を楽しめるようになりました。旦那さんや子供たち、そして、アイメイトだって家族。家族みんなで楽しくお出かけして、分からないところは気軽に誘導してもらえばいいんじゃないの？それに、拒否されたら市役所の相談窓口もあるんだし……。そう開き直ることができてから、パートナー（アイメイト）とのお出かけがとても楽しくなりました」

思えば、アイメイトを得たことで、自分一人でもしなければいけないという気持ちが強くなりすぎていたのかもしれない。「どうしても一人でやらなきゃ、一人で買い物しなきゃ、自立しなきゃいけないんだと強く思っていると、表情が固くなるんでしょうね。それで周りの印象も良くなかったのかもしれない」。肩の力を抜いてから、嫌な思いをすることが少なくなった。

ご主人の健一さんと共に大の音楽好き。子供たちの名前も、音楽にちなんだ奏（かなで）君、音々（ねね）ちゃんだ。アイメイトライフに余裕が出てきた今、喉を痛めて中断していたサックスを再開した。隣の教室へ、電車に乗って週1回アイメイトと共に出かける。奏くんのバイオリン、音々ちゃんのピアノと合奏も楽しめるようになり、家族の絆がますます深まったと感じる。

「家族で出かける時も、アイメイトがいるとすごく助かります。今までは白杖を持って旦那さんや子供たちにつかまっていたので、何も持ってあげられない。アイメイト歩行なら、（片手が空くので）私が娘の手を引いたり、荷物を持つことができます。途中で旦那さんと分かれて、『じゃあ、私は病院に行くから、あなたは先に子供たちを連れて帰って』というようなこともできる。誰かの予定に合わせて行動しなければいけないという不自由さもなくなりました。白杖では何度も畑に落ちたりもしましたが、

アイメイト歩行では一切危険な目に遭っていません」

最初は「入店拒否」というアイメイトがいることによる不自由さに悩んだ。今は、アイメイトがもたらす自由がそれを上回っている。



3.11 からスタートした アイメイト歩行



坂本

光男さん

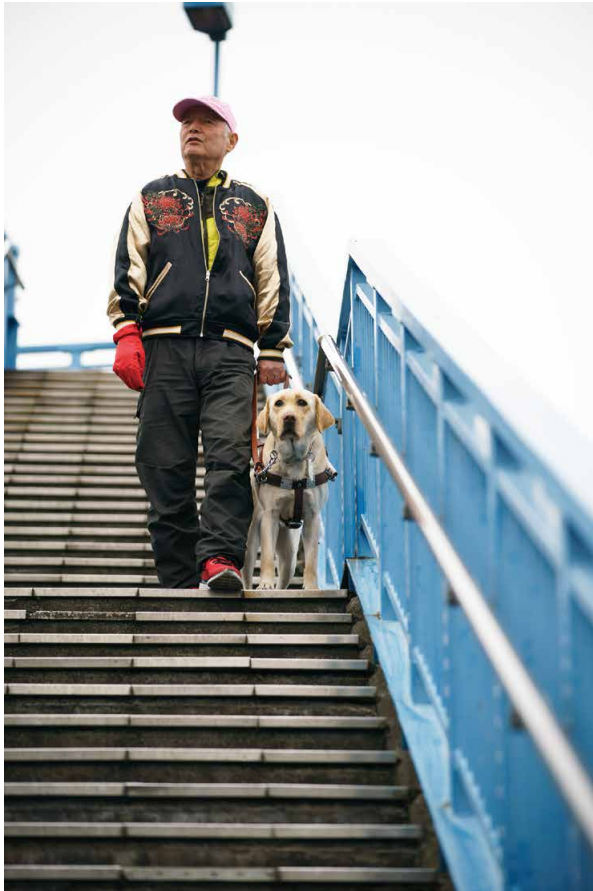
73歳の坂本光男さんは、毎朝5時前に家を出て、アイメイトと散歩する。時間にして1時間半程度、距離にして5、6km。夕方も同じように歩いて、1日の合計歩数は3万歩に達することも珍しくない。背筋をピシッと伸ばして颯爽と歩く。服装もいつもおしゃれで若々しい。最近のお気に入り、は、「抜刀娘」という和柄のスカジャンだ。

そんな坂本さんが暮らすのは、福島県いわき市の住宅街。2011年の東日本大震災で大きな被害を受けた地域だ。坂本さんは3.11の当日、ちょうど1頭目のアイメイトの歩行指導を受けていた。9年後の復興した町並みを一緒に歩き、震災当時のことや最近の暮らしぶりを聞いた。

※年齢・時系列は取材当時

文・写真／内村コースケ（2020年1月取材）

慣れない白杖の一人歩きで



現在は、いわき市の中心部から3kmほどの自宅兼鍼灸治療院で一人暮らし。30過ぎで失明するまでは、出身地の埼玉県川越市で暮らしていた。「男4人の2番目。毎日が取っ組み合いです（笑）」。終戦後間もない昭和21年に生まれ、普通のサラリーマン家庭で育った。「当時はみんな貧しかったですけど、あの時代なりの普通の暮らしだったんじゃないかな。食べるものも本当になかったし、つぎはぎだらけの服を着て、袖は鼻水でテカテカ（笑）。普通の子供ですよ」。今から思えば明るい屋外から暗い部屋に入った時に、目が慣れるまで時間がかかることがあったが、目が悪いという自覚もなかった。

中学を出てすぐに働いた。しばらくは一つの仕事が長続きせず職を転々としたが、19歳で化粧品の卸問屋の社員に落ち着いた。やがて大好きな犬を飼い始めた。最初の犬はチワワのような真っ白い小型犬だ。犬と地道に、幸せに暮らしていたが、30の声を聞こうかという時に視覚に障害が出た。「それで鍼灸マッサージの学校に行きました。そこの同級生にいわきで治療院をやっている人が足りないからと誘われ、こっち（いわき）に来たのです」。その治療院で5年ほど働いた後、独立。今に

至るまで第2の故郷、福島での生活が続いている。

いわきに来てから結婚・離婚を経験。その後もパートナーと暮らしていた。その間は一人で外出することはほとんどなく、歩行で特に困ることはなかった。ところが、10年前にパートナーの女性を病気で亡くしてしまい、悲しみの中、一人で白杖歩行することを余儀なくされた。「そんな日々が1年くらい続いたでしょうか。ある日、側溝に落ちてしまったんです」。膝を強く打って、「これじゃあ、まずいな」と思った。そして、知人がアイメイトを使って一人歩きをしていたことに思い至り、自分も大好きな犬と歩こうと決意した。

アイメイトと被災地の自宅へ

2011年の2月末に、東京・練馬区のアイメイト協会で歩行指導の合宿に入った。「もともと劣等生だから、スムーズにはいかなかったですね」と笑うが、訓練そのもので大きな苦労はなかった。ただ、高い建物が少ないいわきの町と、訓練コースになっている吉祥寺の繁華街などでの音の聞こえ方の違いには戸惑った。「ビル街を歩くと音が反響するようで、車の『シャリシャリシャリシャリ』という（走行）音がどっちから来るのか分からない。そういうことは実際に町を歩かないと分からないので、経験できて良かったですね」と語る。1頭目は、落ち着いてゆっくり歩くタイプのオスだった。

3月11日を迎えたのは、4週間の合宿が折り返し点を迎えようかという頃。地震があったその時、坂本さんは路上訓練に出ていた。大通りの歩道を歩いていた時に強い揺れを感じて立ち止まると、担当歩行指導員と補助スタッフが、とっさに坂本さんと犬を囲うようにして守った。歩行指導員の口から、「道路が波打ってるよ」という言葉を聞いた。やがて、ガラガラと物が落ちる音も聞こえた。「あの音なんですかね？と聞いたら、『瓦が落ちたんですよ』って」。その時は自宅がある東北が未曾有の大惨事になっているとは知らず、その日の歩行指導はそのまま続行された。

東京でも停電や物資の不足などの混乱がしばらく続いたが、残りの歩行指導はなんとか継続された。当然、地元のことを心配だ。「懇意にしていた治療院のお客さんに連絡したら、やっぱりその人も避難していた。私の家は無事だけど、茶碗だコップだなんだと全部棚から落ちているから、『避難所から戻ったら片付けてあげる

から、それまでは家に帰ったらだめだよ』と言われました」。後に、自宅は修繕が必要な半壊状態だったと分かった。

4週間の歩行指導を卒業すれば、皆、アイメイトと単独歩行で意気揚々と自宅に戻る。しかし、坂本さんの場合は、記念すべき1頭目との直帰は叶わず、ひとまず川越の実家へ。10日ほど実家で過ごしてから、高速バス路線が復旧したと聞いて、いわきへ向かった。「道路が波打っていて、バスもふんわかふんわか走っていました。バス停を降りると、やっぱり道路が持ち上がったたりなんかして、犬はそこで止まる。歩道の段差ではないことを確認してGOと言って進む。そんなことを繰り返して、本来なら20分で歩ける道のりを30分くらいかけて家に帰りました」。

その頃にはライフラインも復旧していてスーパーには食料品も並んでいたから、当面の日常生活には困ることはなかった。その点では、隣の宮城県あたりよりはましだったかもしれない。しかし、いわきと言えば、放射能漏れ事故が起きた福島第一原発の近く。不安はなかったのだろうか。「その当時の市長が『いわきは大丈夫だから』と言っていたんでね……。でも、子供がいる家庭なんかはみんなどこかへ避難して、一時はゴースタウンだったらしいですよ。まあ、私は当時でもう64歳だったから。放射能浴びても浴びなくても、長生きする人は長生きするし、なんてね(笑)」。9年経った73歳の今も、至って健康体だ。

ハーネスが壊れた理由は……

生活が落ち着くにつれ、自由に一人で外出できるアイメイトがいる生活の快適さを感じた。もともと犬が大好きで、続けて小型犬を飼ってきただけに、常にそばにぬくもりがある暮らしが戻ってきたことも大きな癒やしになった。それでも、アイメイトとの絆がより確かなものに深まるまでには、1年くらいかかったという。「なんて言うのかな、なかなかツーと言えばカーという感じにはじゃなくて、そのたびにコーナーにつまづいてみたりね」。

特に困ったのは、ハーネスをすぐに壊してしまうことだった。胴輪とハンドルをつなぐ部品が、いつの間にか壊れてしまうのだ。最初は、どうしてそうなるか分からなかった。4回壊したところで、協会の原祥太郎歩行指導部長がフォローアップに来て、歩行時に左に寄り過ぎてハーネスがブロック塀などにたびたび擦れていたことが分かった。「でも、原さんがハーネスを持って歩いてみると、ちゃんと擦らないで歩くんですよ。やっぱり、(犬のせいではなくて人によって)違うんだなあって(笑)」。

安全なアイメイト歩行の基本はキープレフト(左側通行)。坂本さんもアイメイトもその点で間違った歩き方はしていなかったが、少々忠実に守りすぎていたようだ。道の端から少し間を空けて歩く練習を繰り返すと、よりスムーズに歩けるようになった。以後、ハーネスを壊し



たことはない。

朝夕の散歩のほかに、アイメイトとよく行く場所は「郵便局、自分と犬のお医者、それと以前は駅前の飲み屋街にもよく行ったな」。道に迷うことも時々ある。そういう時は、「すみません。迷子になりました」と遠慮なく通行人に聞く。「そうすると、中学生だとか高校生とか、男の子でも女の子でも親切丁寧に教えてくれますよ。そっちの方まで一緒に行ってあげるわとか、一緒に行くよとか。白杖よりもアイメイトがいたら、よく教えていただける。それが得な点かな」。

リタイア犬の真の幸せのために

1頭目は9歳半で引退させた。まだまだ元気だった。「使用者仲間に『リタイア犬奉仕をしてくれる人だって、衰えてから毎日毎日お医者通いじゃつまらないじゃない』と言われてね。『なるほどそうだな』と思って、奉仕の人も一緒に歩ける楽しみがあるうちに離すことにしました」。協会にその旨伝え、協会にリタイアさせた犬を預けに行ったその足で、次の歩行指導に入ることになった。だから、寂しい思いをする間はなかったと笑う。

「ある人に聞いたらね、『あのね、坂本さん、見送りなんかしたって、犬は（リタイア犬奉仕の）新しい人にしてばを振ってちっとも振り向いてくれないよ。今まで使っていた自分が涙流しながらそこに立っていても、しっぽ振ってスイスイ行っちゃうからね』と言ってね。『ああそうなんだ、じゃあ見送ってもしようがないな』なんて思っているうちに、もう次の犬が来ましたから。今度の犬はどんなかな？ということまで頭がいっぱいですよ」。

この言葉には、多分に照れ隠しもあるだろう。「元気なうちに、スムーズに奉仕者のもとへ旅立たせる」。それが坂本さん流の初代アイメイトへの感謝の気持ちの表し方だった。

「それと、行き先はできるだけ遠い方がいいと思いました。近所で『リタイアしたらその犬ちょうだい』と言っていた人もいたんですよ。でも、私がそばを通ると思い出してかえってかわいそうでしょ。だからその人には『うーん、ダメ』って言ったんですよ」

2頭目のアイメイトは小柄なメスで、今4歳半。元気で活発な性格だ。「引っ張られるような感じで訓練が始まりました。ググググッと、早足で歩く感じでしたね」。今ではすっかり息が合い、坂本さんの歩調に合わせてちょうどよいペースで歩けるようになった。昨年の学園祭の啓発イベントで再会した担当歩行指導員に、「前を向いて胸を張って堂々と歩いている姿が素敵でしたよ」と言われたのが、とても嬉しかった。

アイメイトは甘えん坊

これからの日本は、少子高齢化がさらに進んでいく。坂本さんのような独居で高齢なアイメイト使用者も増えていくだろう。「私もずっと家族がいればアイメイトは持たなかったと思います。やっぱり私なんかのような一人暮らしの方がアイメイトを必要としているのかな。若い人でもアイメイトがいた方がいい場合も多いと思いますけどね」。現状を見渡してみると、家族と暮らしていても、自立志向が強い人ほどアイメイトを希望する傾向が強いと感じる。一方で、若い世代を中心に、家族の援助や同行援護サービスで十分だからと、アイメイトの必要性を感じないという声もある。「歩行の自由」と「自立」の関係を改めて見直す時期に来ているかもしれない。

「特に今のアイメイトは女の子だからか余計に、みんなかわいかわいって言ってくれますよ。甘えん坊です。アイメイトはみんな甘えん坊です」。そう目を細める坂本さんの足元で、アイメイトが、「クーン、クーン」と寝言を言っていた。



生きた目がそばにある 安心感



磯村

千夏さん

現役世代のアイメイト使用者には、共働き世帯も多い。東京都在住の磯村千夏さんの場合は、夫の和紀さんも視覚障害者で、共に鍼灸マッサージ師として別々の職場に通勤している。アイメイトと3人暮らし。夫婦揃って外出する時は、アイメイトと千夏さんが前を歩き、白杖を手にする和紀さんは空いている方の手で千夏さんの腕や鞆の紐に掴まってついていく。

その光景だけを見ると“婦唱夫随”の構図に見えるが、それぞれに自立した現代的な夫婦だ。お互いの仕事や趣味には干渉せず、その一方で、休日には揃ってショッピングやレジャーを楽しむことも多い。歩行の仕方についても、自分流を貫く。千夏さんはアイメイトを持つと決めた時、特に夫に相談しなかった。和紀さんというと、アイメイト歩行の自由度などは認めつつ、自分に合っている白杖歩行を続けている。そんな「マイペースで仲がいい」夫婦の日常と、千夏さんの職場でのアイメイトライフを聞いた。

文・写真／内村コースケ（2021年4月取材）

マッサージの仕事は天職

千夏さんは約20年間、読売新聞東京本社のマッサージルームで働いている。コロナ禍の状況によって時短営業もあるが、平常時は月～金の10～18時の勤務。自宅から大手町の会社まで、私鉄と地下鉄で乗り換え1回の約1時間通勤だ。アイメイトを持つ前も今も、特に通勤で困ったことはないという。

「私の場合は白杖で歩行できなかったというわけではなくて、選択肢の一つとしてアイメイトと歩きたいと思いました。抽象的な言い方になってしまうかもしれませんが、生きた目が側にあるというのはやっぱりすごく助かる。訓練された犬が生目で見れば、人間同等の誘導してくれる。人と歩いているのに近い形で歩けます」と、アイメイトとの毎日の通勤の快適さを語る。社内での勤務場所は、メインエントランスからエレベーターで上階に上がり、突き当たりにあるマッサージルーム。社員の福利厚生施設として、本社に勤務する新聞記者や営業マンなどが利用する。輪転機が地下にあった旧社屋の時代には印刷の現場で真っ黒になって働く人たちも常連だった。「職種によって体の辛いところも違ってきます。会社内のマッサージルームといってもさまざまな職種の人が利用するので、町で開業している治療院と仕事の内容や質はあまり変わらないかもしれません」。平常時には、同僚と交代で1日に6人ずつ、計12人のお客さんを受け入れている。

そんなマッサージの仕事にやりがいを感じている。「コロナ禍になって緊急事態宣言が発出された時に、私たちは自宅待機になったのですが、(緊急事態宣言が)明けてマッサージルームが再開してすぐに来てくださったお客さんが、『ああ、やっと開いてくれた、良かったよ、待ってたよ』って言ってくださいました。それを聞いて、本当に有り難いと思ったし、自分はこの仕事が好きなんだなあ、とあらためて気づきました。その日家に帰って、思わず『ああ、楽しかった』って、言いました。マッサージは案外天職なのかなって思っています」。

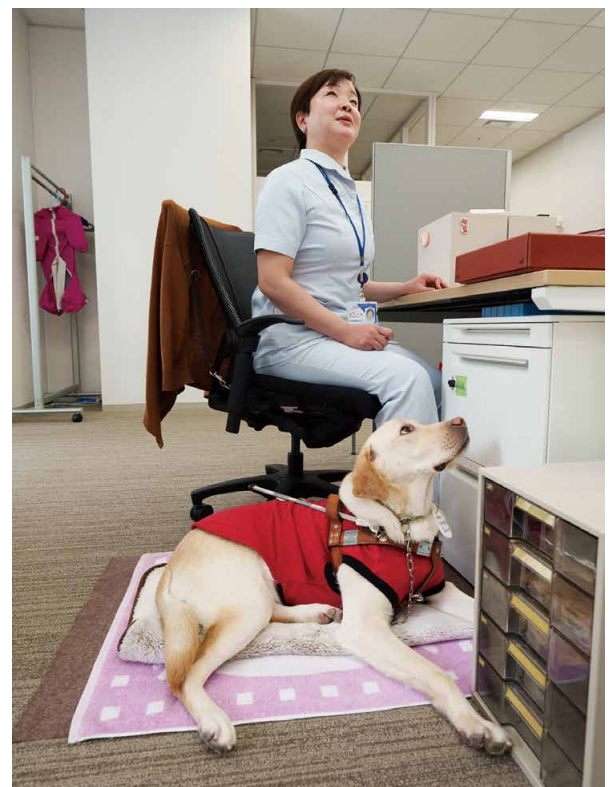
職場にワン・ツー（排泄）場所があるのがありがたい

社内でのアイメイトの待機場所はマッサージルームに隣接する事務室。勤務中はここでおとなしく寝ている。

休憩時間に社員食堂や売店に移動する時は、もちろんアイメイトと一緒に。「頭の中に地図を描いて、割と社内も自由にあっちこっち歩いていますね」。いつも同じルートばかり歩いていると、アイメイトが「どうせこの道でしょ？」と勝手に進んでしまいがちになってしまうという。そのため、千夏さんは、たとえば日によってわざと乗るエレベーターを変えている。「低層階用に乗ってみたり、高層階用に乗ってみたり、中層階用に乗ってみたり。アイメイトに『次は何をするんですか？』と主人の指示を聞く姿勢を常に持たせておくために、社内でも社外でも、あえて一定のルートに固めないよう行動しています」。

入社当初は白杖で通勤していた千夏さん。2年後にアイメイトを得たが、当初からアイメイトと一緒に行動する千夏さんに、社内では皆自然に接してくれたという。「私が社内で初めてのアイメイト（盲導犬）使用者だったのですが、担当部署の方が、仕事中の犬に『触ってはいけません』『声をかけてはいけません』と、一生懸命広報してくださいました。町中ではコンビニなどで立ち止まっていると後ろから手を出して触っていくマナー違反の人もいますけど、社内では本当にありがたいことに、そういう人は全くいません」。

アイメイトを伴って通勤する人にとって、「一番のネックになるのは、会社内でのアイメイトの排泄場所」



だと千夏さんは言う。多くの企業・団体ではアイメイト（及び盲導犬）使用者を受け入れた経験が乏しく、排泄場所の確保にも苦労しているようだ。その中で、読売新聞東京本社では、千夏さんがアイメイトを持った当時の旧社屋の時代から、専用の排泄場所を用意している。現在の社屋では、裏口を出たすぐの敷地内に屋根と水道のある排泄場所がある。アイメイトに排泄させる際には、使用者が「ワン・ツー・ワン・ツー」と号令をかけながら自分の周りをぐるぐる歩かせて促すが、そのスペースは十分に確保されている。小便は備え付けの水道ホースを使って流せば良い。天井があって、雨の日も濡れずに済む配慮もありがたい。

「快適なワン・ツー（排泄）場所をきちっと準備してくださっているおかげで、アイメイトの体に負担をかけることなく、安心して勤務できます。本当にありがたいことです」

「盲学校に行きたくない」と泣いた子供時代

生まれは長崎県長崎市。中学の途中までは普通校に通っていた。「網膜色素変性症なのですが、子供の頃は少しは見えていました。通学も白杖を使わずに普通にしていましたし、体育の授業もみんなと一緒に受けていました。席を必ず一番前にしてもらおうとか、板書を書き写す時は席を立てて黑板まで見に行っていなどの配慮はしてもらっていました」。

小学生の時、父母と祖父母が集まって、千夏さんを「盲学校に行かせた方がいいと医者に言われた」と話しているのを偶然聞いてしまった。「その当時は盲学校ってどういう所か知らなかったの、暗いイメージだったんですよ。だからそこにやられると聞いた時はショックで『行きたくない』と泣きました」。



勉強が好きで、将来は学校の先生になりたいと思っていた。それなのに、中学に上がってから教科書や黒板の字が見えなくなり、「もう勉強についていけない」と思った。そして、両親に「自分の頭がどうこうではなくて、見えないがために勉強ができない。もう無理」と、自ら盲学校への転校を申し出た。そして、東京の全寮制の盲学校で、和紀さんと知り合った。

「お互いに第一印象は最悪だったんですよ。和紀さんは名古屋の都会の人で、なんか、つんとしていて怖いなと思っていました」。「いや、（こっちの印象も）似たような感じだよ」と和紀さんが応じる。それがだんだんとお互いを知るにつれ「面白いやつかもって（笑）」。

いたたまれない気持ちになった 白杖歩行での出来事

アイメイトを得ようと思ったのは、2004年の秋。「もともと自分たちの進路についても、お互いに話し合うというよりは、自分で決めて『こうしたから』『あっ、そう』という感じでした。アイメイトをもらおうと決めた時も、確か『もう決めたから』って」。「そうだね。『ふーん、いいんじゃない』と、それだけだったと思う」と言う和紀さん自身は、白杖歩行に不自由を感じていないから、今のままで良いと思っているそうだ。

千夏さんがアイメイト歩行を始めようと思ったのは、前述したように、そばに「生きた目」が欲しかったからだ。実家で犬を飼っていて、もともと犬が好きだったことも大きい。そして、白杖で歩いていた当時、女性ならではの悩みもあった。「白杖を持っている女性って、痴漢に遭いやすかったり尾けられたりすることがあるんです。うら若き乙女だった頃は、私もそういう目にちょくちょく遭ったので、大きい犬と一緒にいればボディガードとしても良いかな、とは思いました」。

そして、アイメイトを得る決断を最終的に後押しした出来事があった。職場がある大手町を歩いていた時、「前を横切ったおばあちゃんが白杖に引っかかって転んでしまった」と千夏さん。そして、和紀さんは、その日帰宅した時の千夏さんの様子をよく覚えていると言う。「明らかに向こうの不注意なのに、こっちが謝らなければいけないことに、どうしても納得いかないと言っていたね」。「そう、あの時私、泣きながら帰って来たのね。も

「う電車の中からわんわん泣いていて。向こうは特に言葉では強く責めなかったですよ。でも、自分は悪くないという態度は明らかで、いたたまれない気持ちになってしまいました」。

「そんなに褒めてくれるなら 俺しちゃうかな」



現在のアイメイトが4頭目。初めてのオスだ。「最初はオスと接したことがないから大丈夫かな、と思ったのですが、オスの方が単純なので逆に扱いやすい。ひたすら褒めると調子に乗ってやってくれるので（笑）。たとえば、ワン・ツの場面で、女の子は今はいらない、この場所嫌だとなったら、絶対にやらないんですよ。でも、この子は最初は、『え？俺はいらないけど』って言っているけど、1歩でも2歩でも回ってくれたら『あ、そうそう、偉い。グッド、そうそうそう、上手だね』って言い続けていると、『え？そんなに褒めてくれるなら俺しちゃうかな』という感じでやってくれるので、男って単純だなんて思います（笑）。

休日には家を出て初めてのコースを数時間散歩するこ



ともある。道に迷っても周囲の人に聞けばなんとかなる。そんな小さな冒険が日常を彩り、アイメイトとの絆を深めている。でも、緊急事態宣言が出て町から人通りが消えた時には、さすがに困った。「外を歩いている人はいないし、お店はやっていない。人がいたとしても自転車で通り過ぎていくので声をかけられない。やっと見つけた人に現在位置を聞けたのですが、自宅まではまだ遠いことが分かりました。でも、まあ、アイメイトがいるからなんとかなるかという感じで。アイメイトに『どうしようかね、ここどこだろうね』と話しかけながら、結局2時間くらい迷った末に帰ってくることができました」。

夫婦ともにお酒が好きで、ビールを片手に野球観戦を楽しむことも。ラジオの実況を聞きながら試合経過を追いかける。球場の雰囲気を楽しむ。コロナ前には温泉旅行にも度々行っていた。一方で、千夏さんは和太鼓を習ったり、和紀さんはガンブラ（アニメ「機動戦士ガンダム」シリーズのプラモデル）作りに凝ったりと、それぞれの趣味の時間を大切にしている。家事も無理なく分担。お互いが肩の力を抜いていられることが、夫婦円満の秘訣なのだろう。

「アイメイトがいると、道が分からなくても、違う道でも帰れるので心強いですね。それに、犬が好きな人が声をかけてくれるし、こちらから声をかけた時の反応がいいので、人に（道を）聞きやすくなりました」



盲導犬の父
塩屋賢一とアイメイトの歩み



1950年代後半、旧協会付近
(東京都練馬区関町)で

Introduction to **eyemate** History



1957年に日本で初めて誕生した盲導犬は、盲学校教師の河相洌（かわい・きよし）さんのパートナー、『チャンピイ』です。そのチャンピイに盲導犬としての訓練を施し、河相さんとの歩行指導を行ったのは、後にアイメイト協会を設立した塩屋賢一です。

子供の頃から犬の訓練士に憧れていた賢一は、戦後すぐに『アスター』という頭のジャーマン・シェパードを手に入れました。アスターと共に警察犬訓練競技会などで実績を積んだ賢一は、当代随一の訓練士として、米軍関係者や当時の富裕層の家庭犬をしつける愛犬学校を始めました。その傍らで、「もっと世の中のためになることをしたい」と始めたのが、盲導犬の育成です。

賢一は戦後間もない1948年、海外の先例にとらわれず、実際にアスターと一緒に目隠しをして街を歩き、体当たりで盲導犬の育成法を試行錯誤しました。こうして、1949年に完成した賢一オリジナルの盲導犬とその訓練法は、今もほとんど変わらずにアイメイトとアイメイト協会の歩行指導員に受け継がれています。

『チャンピイ』以降、賢一とその弟子たちが育てたペアが、次々と社会に巣立っていきました。そして、賢一の盲導犬育成事業はやがて自治体からの委託を受けた公益性の高い事業となり、1967年に『日本盲導犬協会』を設立。しかし、1971年に同協会の理事たちが賢一の元を去る形で分裂し、賢一は『東京盲導犬協会』（後に現在の「アイメイト協会」に改称）を新たに設立します。この時から、「盲導犬」の呼称も「アイメイト」へと改められました。

その後も、アイメイトの公共交通機関への乗車、職場への同伴や飲食店への入店といった社会参加への努力が使用者自身や賢一ら協会関係者によって進められました。今、視覚障害者とアイメイトのペアが颯爽と街を歩き、生き生きと社会参加している裏には、半世紀以上にわたる大勢の方々の努力があったのです。



塩屋賢一の生い立ち

軍用犬の訓練士に憧れた 少年時代

日本で初めて盲導犬を育成した“盲導犬の父”塩屋賢一は、1921年12月1日、長崎県・五島列島北部の小値賀（おぢか）島で生まれました。両親と3人の弟と2人の妹との8人家族で、一家は賢一が6歳の時に北海道へ移住。そして、賢一が10代の時に家族で上京します。

上京後に住んだ赤羽の家の近くには、軍用犬の養成所がありました。父が飼っていた猟犬と犬小屋と一緒に寝るほど幼少時から犬好きだった賢一にとって、それは夢のような立地でした。学校から帰るとカバンを放り出して一目散に養成所に向かい、金網越しに軍用犬のシェパードの訓練の様子を見に行きました。そんな日々を通じて、犬の訓練士に憧れるようになります。

その頃、塩屋家では『ケイスケ』という雑種犬を飼っていました。賢一は、訓練所から戻ると、早速今見てきた訓練法を真似てケイスケに色々なことを教え込みました。そんな少年時代が、“盲導犬の父”の原点となりました。



生後約半年の賢一



少年時代の賢一（左端）。母・亀代（後列左）、兄弟らと

太平洋戦争を生き延びる

青年になった賢一は、犬の訓練士という子供時代の夢を持ち続けながらも、得意の理系の學問を生かして東京高等工芸専門学校（現東京工業大学）に進みました。しかし、卒業したのは太平洋戦争の戦局が押し詰まった1944年のことで、夢を追うどころではない時代でした。他の多くの学友同様、卒業後すぐに海軍に徴兵されました。

幸か不幸か、賢一は館山の海軍砲術学校で兵役中に結核で倒れ、同年11月に兵役免除となります。退院後、帰京してすぐに空襲に遭いましたが、これも運良く生き延びました。しかし、戦時中の生と死は紙一重でした。賢一は戦後、「兵役時代に健康な体であったら、そのまま海の藻屑となっていたであろう」と述懐しています。



大学卒業後、徴兵される直前に学友たちと



海軍時代の賢一

盲導犬の育成を決意

戦後間もなく訓練士に

1945年8月、戦争を生き延びた賢一は、運良くラジオなどを作る電機メーカーに就職しました。そして、すぐに子供時代から憧れていたシェパード犬を手に入れます。十分に性質を見極め、当時としては大金の300円をはたいて都内の愛犬家から譲り受けたメスのシェパードの子犬を、賢一は『アスター』と名付けました。

アスターとの蜜月の日々を経て、1947年に結婚。苦しい家計の中、妻・和子が夕食に一切れしか買えない肉を用意すると、賢一は半分しか食わず、半分をアスターにやってしまうのでした。和子は自分より前から賢一と一緒に生活していたアスターに、「アスターは先妻みたいね」

とやきもちを焼くこともありました。

翌1948年、賢一はアスターと共に警察犬訓練競技会に出場します。当時はまだアマチュアだった賢一ですが、プロの訓練士たちを差し置いて見事優勝します。その一週間後の大会でも「訓練ジークリン」(メスのチャンピオン)に輝き、「名訓練士・塩屋賢一」が誕生しました。

「もっと社会の役に立ちたい」

チャンピオン犬・アスターの子犬たちが高く売れてなんとか元手ができ、同年、勤め先の会社が倒産したのを機に、家庭犬の訓練所『塩屋愛犬学校』をスタート。進駐軍の関係者や闇市で儲けた新興成金といった当時の富裕層からの依頼で繁盛しま

した。

しかし、賢一は金持ち相手の愛犬学校の仕事に満足できず、「食べていくためだけでなく、人の役に立つ仕事をしたい」という思いを強くしていきます。そんな時に、欧米ではシェパードが盲導犬として活躍していることを知ります。そして、戦前にドイツから盲導犬を輸入したことのある相馬安雄氏を訪ねて相談すると、「君は電気の技師では日本一にはなれないが、犬の訓練でなら日本一になれるかもしれない」「是非君に(日本初の)盲導犬を作って欲しい」とハッパをかけられます。その時の決意が、“盲導犬の父”としての歩みの第一歩となったのです。



アスターと賢一



警察犬訓練競技会出場時の様子



盲導犬用のハーネスを手にする賢一

盲導犬の完成



目隠しをして町を歩く賢一

目隠しをしてアスターと共に

盲導犬を育てる決意をした賢一でしたが、当時はノウハウを教えてくれる人もいませんでした。辞書を片手にアメリカなどから取り寄せた資料をあさり、＜車道と歩道の境や曲がり角ではいったん止まる＞＜「右」「左」などの合図で曲がる＞＜道路上や人間の頭の高さの障害物を避けて通る＞といった盲導犬に必要な能力は理解しました。

しかし、その具体的な訓練法が記

された文献はありませんでした。目の前の日本の路上を、視覚障害者と共に歩くにはどうしたら良いか。賢一は、アスターと共に体当たりで訓練に取り組む決心をしました。

まず、視覚障害者の世界を身をもって知るために、普段から目隠しをして生活しました。そして、何も見えない状態で外を歩き、盲導犬は何に注意すれば良いか、人はどのように誘導すれば良いか、一つひとつ確認し、アスターに教え込んでいきました。

時にはドブに落ち、目から火が出るほど思い切り顔をぶつけたこともあり、車にひかれそうになってトラックの運転手に怒鳴られたこともあり、そんな壮絶な1年間を経て、ついにアスターの訓練が終了。賢一独自の、そして日本初の盲導犬の育成法が確立したのです。賢一28歳、1949年のことでした。

アスターの訓練を終えた後も、賢一はその子の『バルド』、さらにその子の『ナナ』にも盲導犬としての訓練を施し、独自の盲導犬訓練法の完成度を高めていきました。



アスターと共に体当たりで挑んだ

運命の出会い

初めての依頼

犬の方の訓練は成熟し、後は盲導犬を希望する人を待つだけとなりましたが、当時の日本には先例がないことでした。賢一のもとに、ようやく最初の具体的な盲導犬育成の依頼が舞い込んだのは、アスターの訓練が完成した7年後の1956年のことでした。

依頼主は、東京・大田区に住む河相達夫（かわい・たつお）さんという外交官。戦時中の厳しい労働と栄養失調が原因で失明してしまった息子の洸（きよし）さんのために、かわいがっている『チャンピイ』という犬を盲導犬にして欲しいということでした。洸さんは賢一の5歳年下で、当時慶應義塾大学の4年生でした。

河相さんとチャンピイ

チャンピイは、アメリカ大使館付き海軍武官、ウィリアム・C・ノーベル大佐のもとで生まれたチャンピオン犬の血を引くジャーマン・シェパード。将来チャンピオンになれるようにと、チャンピイと名付けられました。ノーベル大佐は、パーティーで河相達夫さんと知り合い、息子の洸さんが目が不自由だと知って「盲導犬にしてはどうか」と、まだ子犬だったチャンピイを譲ったのでした。

洸さんは、チャンピイを大切に育てました。厳しくしつけながらも、毎日ブラシをかけ、一緒に眠りました。そして、盲導犬にする訓練をしてくれる人はいないかと、犬に関係のある仕事をしている人に聞いてまわるうちに、戦前に盲導犬を輸入し

た相馬安雄氏から「ちょうどいい人がいます。その人以外に盲導犬の訓練を出来る人はいないでしょう」と賢一を紹介されたのでした。

大学在学中に目を悪くし、治療のため休学していた洸さんは、失明した後、前例がないからと周囲から退学を勧められました。しかし、洸さんは自立して復学することを固く決意していました。戦前の新聞記事や外交官の父のもとでの海外生活を通じて既に盲導犬の存在を知っていた洸さんは、まず、盲導犬で歩行の自由を得ようと考えたのです。チャンピイとの出会い、そして、賢一との出会い。このパイオニアたちの運命的な出会いが、「国産盲導犬第1号」の礎となったのです。



河相さんはチャンピイを盲導犬になる前からとても大切にしていた

出会った頃の河相さんとチャンピイ、賢一。
賢一は、初見ではチャンピイの盲導犬としての素質に懐疑的だったという

国産盲導犬第 1 号

愛情でチャンピイを盲導犬に

賢一は、まず、チャンピイの訓練から始めます。河相さんからの依頼を受けた1週間後にはチャンピイを自宅に連れ帰り、生活を共にしました。賢一のチャンピイの第一印象は「愛嬌はあるが、片方の耳が垂れていて、目の輝きも鋭さに欠けている」という、あまりいいものではありませんでした。

しかし、実際に訓練を始めてみると、チャンピイはアスターたちに劣らず、教えたことをよく覚えてくれました。他の犬とけんかをするといった欠点もありましたが、叱ってやめさせるのではなく、よくスキンシップを取って愛情を注ぎ、信頼関係を育てていきました。そして、目隠しをして毎日一緒に街を歩きました。数カ月後には、チャンピイは脇見をせずにまっすぐ歩くようになり、

やがて障害物を避けたり、「ワン・ツー」という指示に従って排泄をするなど、盲導犬に必要な能力を一つずつ身につけていきました。

命がけの歩行指導

1年余りかけてチャンピイの訓練を終えると、1957年夏、河相さんがチャンピイと共に歩くための歩行指導が始まりました。賢一はまず、信頼関係を築くために、チャンピイの日常の世話を河相さん自身が行う訓練をしました。続くハーネスをつけての歩行では、最初のうちは河相さんとチャンピイの息がなかなか合いませんでした。それに、歩行指導を行っていた河相さんの実家がある東京・大森の街は車の往来が激しく、危険でいっぱいでした。

そこで、河相さんが横断歩道などで「行け」と指示を出しても、チャ

ンピイは車が来たら後戻りして指示に従わない、という後に「利口な不服従」と呼ばれる訓練を施しました。賢一が車を運転して、道路を渡ろうとする河相さんとチャンピイの前にわざと突っ込んでくる、という荒療治をしたこともありました。

それらをマスターして迎えた夏休み終盤のある日、賢一は河相さんに、まだ行ったことのない1.5kmほど先の郵便局で切手を買って帰ってくるという課題を出しました。河相さんは「チャンと一緒に大丈夫」と、あえて大きな通りを信号のないところで渡る難しいコースを選び、見事に切手を手に帰ってきました。出迎えた賢一は、河相さんと手を取り合って喜びました。これが、国産盲導犬第1号が誕生した記念すべき瞬間となったのです。



車道と歩道の段差を教える賢一



河相さんとチャンピイの歩行を見守る賢一（左）

チャンピイと後継者たち

河相さんと共に教壇に

晴れてチャンピイとペアになった河相さんは、当時、大学を卒業して滋賀県彦根市の盲学校の教師になっていました。彦根での生活が始まると、河相さんはチャンピイと町を精力的に歩きました。もちろん、学校でも一緒でした。生徒たちはチャンピイを大歓迎。チャンピイは授業中はいつも教卓の脇で静かに伏せていました。

河相さんは、チャンピイとの日々の暮らしの中で感じたことや問題点、質問をまとめて「チャンピイ通信」と名付けて賢一に書き送りました。それを読んだ賢一は、ある日、彦根までこっそり様子を見に行きました。すると、チャンピイは物陰から伺っていた賢一を横目でチラッと見ただけで、河相さんの指示に従ってまっすぐ歩いていきました。賢一は、その姿を見て、河相さんとチャンピイが名実ともに自立したペアになったことを確信したのでした。

日本初の盲導犬として、チャンピイは、新聞や雑誌で度々紹介されるようになりました。河相さん、賢一と揃ってテレビに出演したこともあります。そして、1967年に12歳で老衰でこの世を去るまで河相さんの目として活躍しました。河相さんは、その後も長年教師を続け、ローザ、セリッサ、ロイドという3代のアイメイト（盲導犬）と共に歩み続けました。



河相さんと共に教壇に立つチャンピイ

チャンピイに続け！

チャンピイの活躍に刺激を受けるように、以後、賢一のもとに続々と盲導犬育成の依頼が舞い込みました。1958年3月に卒業（歩行指導を終えてペアとして社会に出ること）した第2号の松井新二郎さんは、盲人福祉施設の職員として視覚障害者の社会参加に尽力しました。初の女性

使用者・戸井美智子さんは、英語の先生。渡米経験もある自立した女性です。

河相さんをはじめとする初期の使用者のパイオニア精神は、現在のアイメイト使用者にも脈々と受け継がれています。「アイメイトがいれば、いつでもどこへでも行ける」という合言葉のもと、自立したアクティブな人生を歩んでいる方ばかりです。



初の女性使用者・戸井さんとオディの歩行指導の様子

塩屋賢一のメッセージ

塩屋賢一は2010年9月12日、88歳で永眠しました。アイメイトへの思いを未来へと繋ぐ賢一のメッセージを紹介します。

心でつき合うアイメイト

私はいつも、「アイメイトは目です」と言い続けてきました。卒業生が増え、使用者の年代の幅が広くなり、受け入れられる社会環境も変わってきて理解も深まり、使用者にとっては良い時代になったと思います。使用者一人一人が開拓者という感じで努力した10年くらい前と比べ、受け入れられるのが当然のようになっている現況は有難いのですが、それが当たり前として使用者側の気持ちやマナーにゆelmが出ることはないかと気になるこの頃です。

(2001年5月30日)

訓練にはいとおしむ心を、 視覚障害者には情熱を

訓練には犬をいとおしむ心を、視覚障害者には「何としても独立歩行できるようになってほしい」という情熱を持って指導に当たって欲しいと思います。一人一人・一頭一頭それぞれ違います。そのペア歩行を完成させるにはマニュアルを消化するのではなく、個々へのプラスアルファの対応の工夫を要します。それでも適合できない人も、犬もいます。それを無理矢理適合させる事はできません。その判定は常に悩むところですが、そこをきちんと判定することがアイメイトの真価に繋がります。視力の有無に関わらず、「心の視野を広く持って明るく積極的な社会人になりましょう」というのがアイメイト協会のモットーです。

(2005年6月20日)



塩屋賢一のおもな受賞歴

■厚生大臣表彰(1979年)

視覚障害者福祉で実績と功績を残したことが認められた。

■吉川英治文化賞(1982年)

なかなか日の当たらない盲導犬育成事業を長年地道に行ってきたことが讃えられた。

■勲五等瑞宝章(1993年)

盲導犬(アイメイト)事業を通じて社会福祉に長年携わってきた功績が認められた。

■ヘレンケラー・サリバン賞

(2002年)

アイメイトを通じて視覚障害者に歩行の自由を与え、自立と尊厳の獲得、社会参加を支援した貢献が認められた。



賢一と和子夫人

賢一は常に視覚障害者と犬に敬意を払っていた

いまなお続く、共生社会への道

アイメイト協会の誕生

チャンピイ以降、盲導犬を希望する人が増えるのに合わせ、組織だった育成事業が求められました。賢一は、1967年に『日本盲導犬協会』を設立。1970年には一部の理事たちとのポリシーの違いから同協会と決別しますが、翌71年に新たに『東京盲導犬協会』を設立します。1989年には「盲導犬ではなくアイメイト」の考えのもと、『アイメイト協会』に改称。2010年に賢一が死去した後も、賢一の精神と育成法を受け継いだ後継者たちによって公益財団法人として事業を継続しています。

社会参加を目指して

初期のアイメイト使用者は、犬と

行動を共にしているために、「電車には乗れない、職場や学校と一緒にいけない、公共の施設にも入れない」という三重苦に悩みました。現在では、盲導犬の存在を理由とした受け入れの拒否は法律違反とされるなど、社会体制が整ってきていますが、法律がアイメイト（盲導犬）との共生を実現したというよりは、アイメイト使用者個々の努力が実を結び、社会が動いた結果だと言っていいでしょう。

例えば、1970年から近年まで長きにわたってアイメイト歩行を続けた石川県の佐藤憲さんは、奥様と共に地元のバス会社に直談判し、現在では当たり前になっている公共交通機関の自由乗車の先鞭をつけました。それに限らず、多くのアイメイト使用者が、入店拒否や乗車拒否と戦い続けてきました。

その結果、現在では「道路交通法」が改正され、「身体障害者補助犬法」「障害者差別解消法」などが成立し、盲導犬の存在を理由に入店拒否や乗車拒否をしてはならないことになっています。しかし、個別具体的な例では未だ入店拒否・乗車拒否の報告が相次いでいます。2020年2月から3月にかけて行われた全国のアイメイト使用者に対するアンケート調査でも、入店拒否をされた経験があると答えた人は62%に達しました。

2020年の新型コロナウイルスの流行以降、視覚障害者の重要な情報取得手段である「触る」ことが忌避される傾向などにより、視覚障害者が不利益を被るケースも見受けられます。グローバル化が進む中、世界的な視野で共生社会をあらためて考え直す時期ではないでしょうか。



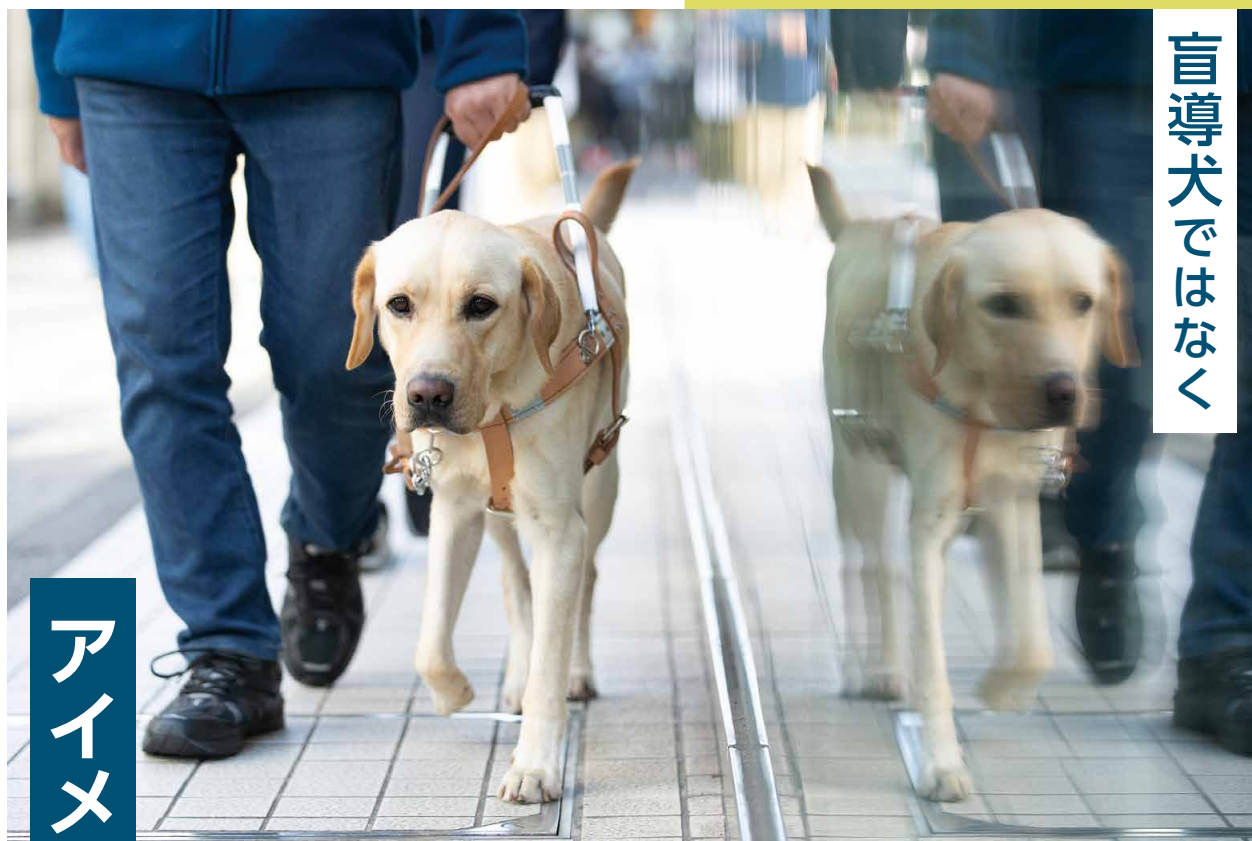
グローバル化が進む今こそ、共生社会をあらためて考えたい

賢一の精神と訓練・歩行指導法は、現在のアイメイト協会の歩行指導員たちに受け継がれている

アイメイトって 知ってる？

What is EYEMATE?





盲導犬ではなく

アイメイト

「私たちが『盲導犬』ではなく『アイメイト』と呼ぶのは、『私の愛する目の仲間』という意味なのです。
『盲導犬』という言い方は、どうも違う」（塩屋賢一）

「アイは I=私」「アイは EYE 目」「アイは 愛 LOVE」 アイメイトは私の愛する目の仲間

アイメイト協会では、あえて「盲導犬」という呼び方をしません。チャンピイが誕生した65年前は、それまで言い慣わされてきた「盲導犬」を使っていましたが、塩屋賢一はその呼び名に違和感を感じ続けていました。そのため、1970年代より独自の呼び名である「アイメイト」を使用しています。

盲人を導く犬＝盲導犬という言葉からは、「利口な犬が人を導いている」という印象を受けてしまいがちです。

しかし、実際のアイメイト歩行では、犬は十分に歩行指導を受けた人の指示に従い、さらには状況に応じて自発的に判断をしながら歩きます。アイメイト歩行は人が主体となった犬との共同作業だと言えるのです。そして、アイメイトは、ハーネスを外した時も心を寄せ合うかけがえのない存在です。ですから、「アイメイト」という呼び名には、視覚障害者の目となる対等なパートナーという意味が込められているのです。

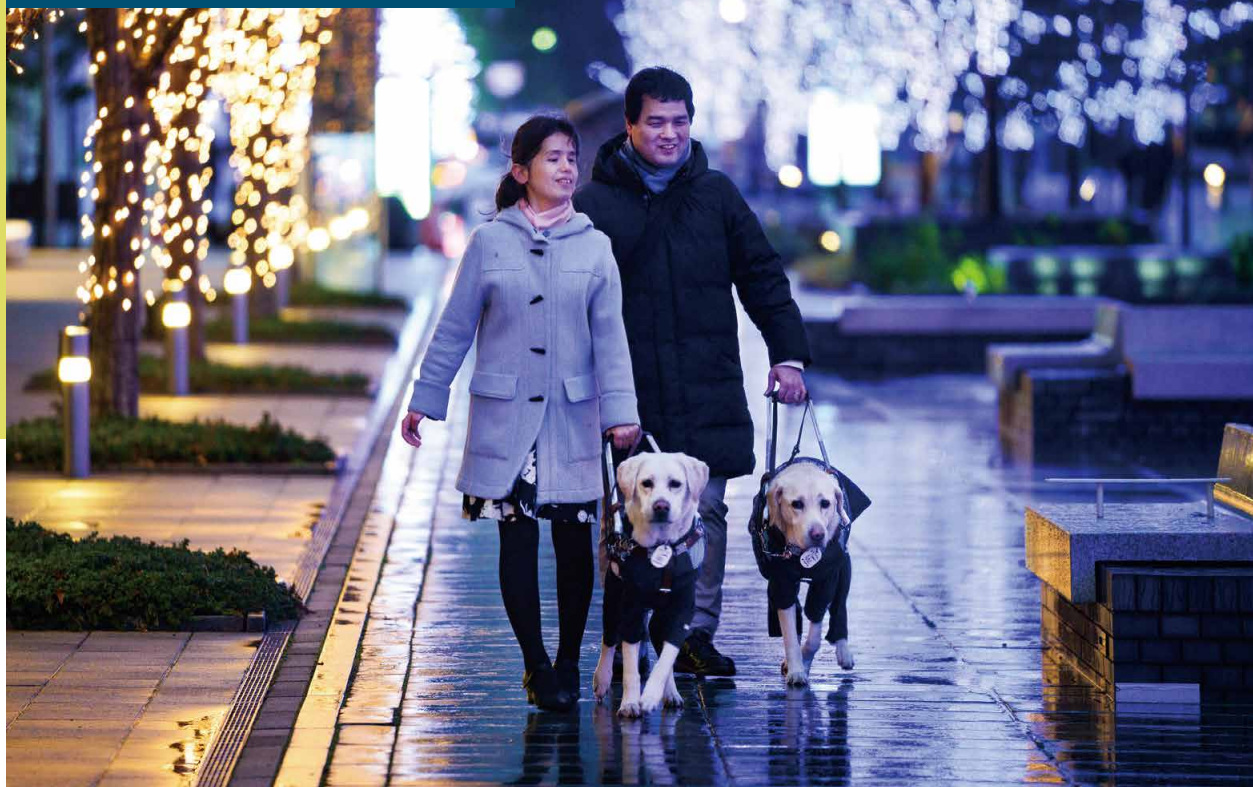
独自の呼称はペアのプライドと訓練の質の証

英語でも一般名詞的に使われる「Guide dog」のほかに、「Seeing Eye Dog」「Leader Dog」など、出身団体やそれに伴う訓練内容によって、いくつかの呼び名があります。国内では、アイメイトと他団体の盲導犬の間に、右表のような定義の違い・能力の違いがあります。

	アイメイト協会	他の10盲導犬育成団体
呼称	アイメイト	盲導犬
定義	同伴者や白杖なしで、全盲者と犬だけで単独歩行できる。	下記のように団体によってまちまちです。 ・白杖との併用が前提。 ・原則として晴眼者が同行する。 ・限定した場所のみ歩行できる。 ・全盲者は対象としない。 ※全盲者が単独歩行できる団体もあります

視覚障害と歩行

アイメイト歩行による「モビリティの獲得」「QOLの向上」



「盲人にとって歩くことがいかに大事か。 歩行の自由を得れば盲人の問題は50%解決できる」

これは、2人目の国産盲導犬使用者で、当時盲人福祉施設で要職にあった松井新二郎さんの言葉です。視力を失った時、ほとんどの人がまず切実に望むのは「まともに歩くこと」なのです。食事をするにもトイレに行くにも、まずは部屋を出て歩くことから全てが始まります。「歩くこと」は、生活の基本なのです。

さらに、QOL（生活の質）の向上のためには、ただ歩くだけでなくモビリティ（移動の自由）の獲得が必要不可欠です。同伴者に手を引いてもらったり、白杖を使うなど歩行の手段はいくつかあります。盲導犬との歩行でも、育成団体によって定義が異なります。その中であって、アイメイト協会では、全盲の人が、白杖を使ったり同伴者を伴うことなく犬だけで歩く「単独歩行」を目指しています。

アイメイトと歩けるようになれば、気兼ねなく好きな時に好きな所へ出かけられるようになります。それはモビリティの獲得に他ならず、つまり、アイメイト歩行は視覚障害者のQOLの向上に直結しているのです。この「モビリティの獲得」と「QOLの向上」を通じて視覚障害者が抱える問題を解決するお手伝いをしていくことが、アイメイト協会の使命です。

歩くことは生活の基本 ～アイメイト使用者の言葉～

「(社会に復帰するために) 解決しなければいけないことは山ほどありましたが、なんと言っても歩行は最大の問題です。じゃあどうやって歩くかと考えた時に、『ああ、あの盲導犬だ。あいつに限る』とひらめいたわけです」(河相冽さん、国産盲導犬第1号・チャンビイの使用者)

「昼も夜も分からない。なんの気力も起きない。夢でも現実でも闇の中。自分の手足の感覚もつかめない。部屋に閉じこもっていた日々の「ターニングポイント」になったのは、外を歩けるようになったことと、点字が読めるようになったことでした」(新井淑則さん、元中学校教師)

「幼い頃に見えなくなった私は、どこへ行くのでも誰かに付き添ってもらわなければいけません。だから、いつも人が来るのをじっと待っていました。アイメイトを得て何が違ったかと言えば、『もう待たなくていい』ということに尽きます。それはそれは嬉しかったですよ」(戸井美智子さん、女性第1号のアイメイト使用者)

アイメイト歩行の実際



ボタンを探す



段差・分岐で止まる



イスやドアを探す



階段・エスカレーターを見つける



進行方向を指示して歩く



一回一回褒める

43 ページで説明したように、アイメイトは「盲導犬」という言葉から連想されるような「盲人を導く犬」ではありません。実際には、使用者が道順を覚え、頭の中の地図を頼りにアイメイトに「ストレート（直進）」「ライト（右）」「レフト（左）」などの指示を出して街を歩きます。アイメイトは歩道と車道の段差などを目安にして交差点や分岐ごとに止まり、使用者が車や人の流れを耳や感覚で捉えて「ゴー（前進）」の指示を出して、交差点・横断歩道を渡ります。

一方、アイメイトは使用者の指示に従うだけでなく、道端に停められた自転車や歩道にせり出した看板などの障害物を自分の判断で避けます。また、車などが飛び出して来た時には、使用者の指示があっても進まずに止まる、後ずさりするなど、自主的な状況判断もするよう訓練されています。これを「利口な不服従」と言います。

アイメイトは「ブリッジ」、「チェア」、「ボタン」などの指示により、階段、イス、盲人用信号機のボタンなどを見つけることもできます。使用者は、アイメイトがこれらをうまくできるたびに、アイメイトを思い切り褒めてあげます。

訓練と歩行指導

アイメイトペア誕生までの2つの柱

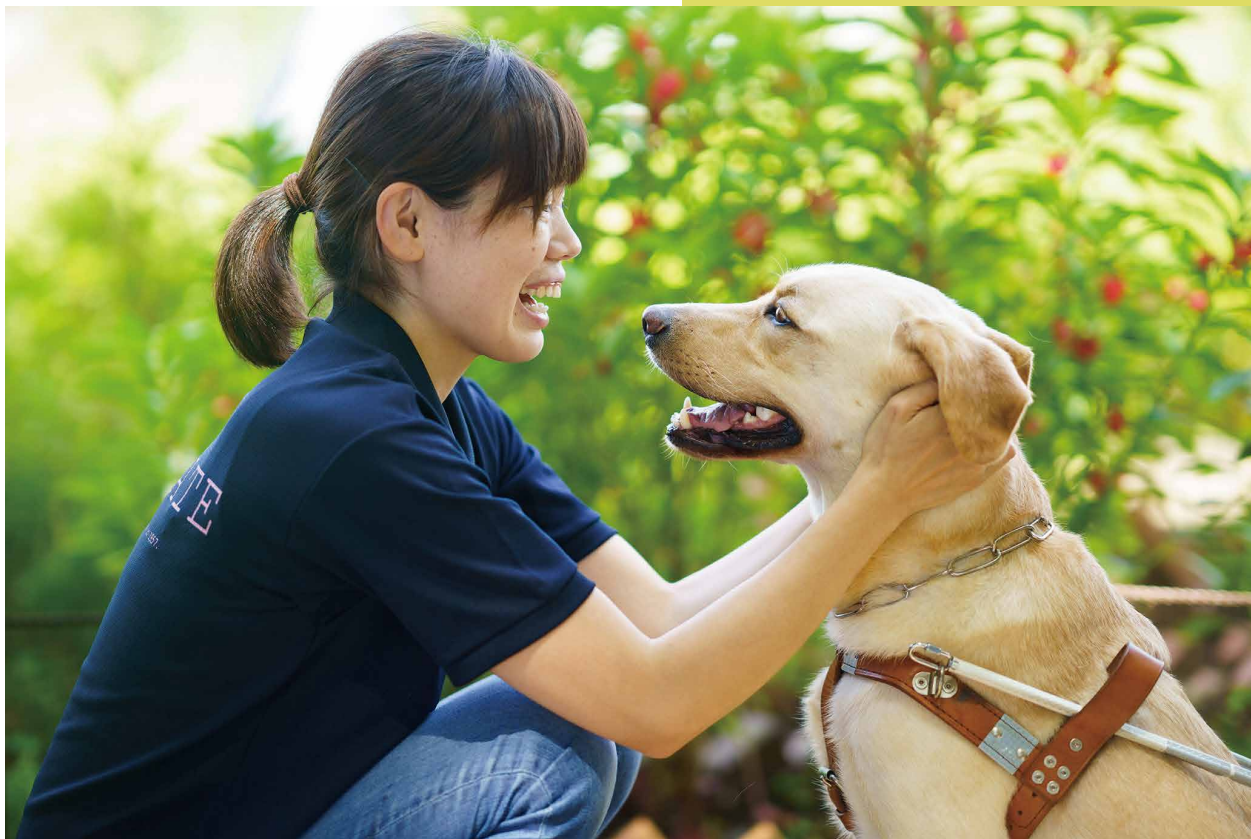


使用者とアイメイトのペアが社会に巣立つまでには、大きく分けて犬の＜訓練＞と犬を使う視覚障害者への＜歩行指導＞という二つのステージがあります。アイメイト協会では、後者の人間教育の部分をより重視し、「盲導犬の訓練士」ではなく、「歩行指導員」と呼びます。アイメイト協会の歩行指導員は、アイメイト候補犬の健康管理から訓練、視覚障害者への歩行指導までを一貫して行います。

候補犬の訓練は、1歳2ヶ月を過ぎた頃から約4ヶ月間行います。その後、訓練した犬をアイメイトの使用を希望する視覚障害者とマッチングし、4週間の歩行指導をします。東京・銀座で行われる卒業試験にパスすれば、晴れてアイメイト使用者とアイメイトのペアが誕生します。



アイメイト協会では、訓練（写真左）も歩行指導（写真上）も、その大半を日々状況が変わる実際の路上で行います。アイメイトが視覚障害者の目となり、安全でスムーズな単独歩行を実現するためには、実践的な訓練と歩行指導が求められるからです。



訓練には犬を愛おしむ心を

アイメイト協会の訓練では、トリーツ（おやつ）などの物理的な「ご褒美」やむやみに叩くなどの「罰」は与えません。よく出来た時には心からの愛情を込めて褒め、使用者の身に危険を及ぼすような行為に対しては、時には犬に正しく通じるように厳しく態度で示します。人と犬の間には必ず愛情を基本にした信頼関係が成立します。これを育むことが、訓練の基本なのです。「訓練には犬を愛おしむ心を」—— 塩屋賢一が国産盲導犬第1号『チャンピイ』を育てた時から続く、実績に裏打ちされた哲学です。



基礎訓練

人に従う心と学ぶ姿勢を育む。最終的には「シット（お座り）」「ダウン（伏せ）」「ゴー（前進）」「ドア（ドアノブを探す）」など約 30 の指示を覚える。



誘導訓練

ハーネスを装着して歩き、視覚障害者と歩く際に障害となるものや危険を知らせたり、回避できるようにする。

歩行指導合宿のスケジュール

～街中の練習コースは合計120km～

歩行指導は、数名ずつ4週間アイメイト協会に泊まり込む合宿形式で行われます。1週目の日曜日にペアとなる犬との初対面があります。その日の午後から担当歩行指導員と外に出て実践的な路上教習を受けます。後半には犬の健康管理や日常の手入れの仕方、電車やバスの乗り方の練習も。卒業試験は銀座と「幻のコース」での単独歩行。卒業式を終えたその足で、1人と1頭だけで自宅へ帰ります。

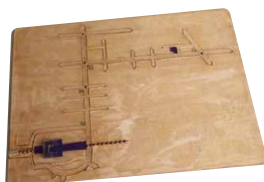
日	月	火	水	木	金	土
						1 入校式
2 犬との初対面	3 Aコース	4	5	6	7	8
9 /	10 Bコース	11	12	13	14 Cコース	15
16 /	17	18	19 Dコース	20	21 獣医師による 健康管理指導	22 電車・バス などの練習
23 /	24	25	26 犬の シャンプー	27 銀座 歩行テスト	28 幻のコース	29 卒業式



4つの練習コースを合計120km歩く

公道を使った練習コースは、協会の周りをまっすぐ歩くAコースから複雑なDコースまで、週を追うごとに難易度が上がり、4週間で歩く距離は合計120kmにも達します。

歩行指導の期間中、道順を確認するために使われる木製の「触地図」（立体地図）。これを指先でなぞって各コースの道順を把握します。



「ハネムーン」

自分の目となるアイメイト候補犬との初対面。この後、各ペアはそれぞれの部屋でゆっくり「ハネムーン」と呼ばれる時間を過ごします。

卒業とは？ ～伝統の銀座歩行テストと「幻のコース」～

学校に卒業試験があるように、2つの歩行テストをパスしてはじめて「アイメイト使用者」になります。一つは、初期の使用者の時代から続く伝統の銀座テスト。そして、その翌日には「幻のコース」。詳細はごく限られた関係者しか把握しておらず、「初めての知らない場所でも単独歩行できる」という、アイメイト歩行の真骨頂が試されます。



銀座歩行テストの様子

アイメイトの健康管理と「ワン・ツー」

使用者にとって、アイメイトは自分の体の一部です。大切なパートナーですから、日常の世話と健康管理は、決して人任せにせず、ブラッシング、耳掃除、歯磨きなども、使用者自身が行います。

排泄（ワン・ツー。ワンは小便、ツーは大便の意味）の世話も、使用者の大切な仕事です。



手で触って健康状態を確認



ワン・ツーの様子

アイメイトの「今」

社会の変化への対応

アイメイトが誕生してから65年の間に、アイメイト使用者を取り巻く環境は常に変化してきました。アイメイト協会では、さまざまな変化に応じて訓練・歩行指導法を工夫しています。



変化の例

■ 公衆電話

携帯電話がなかった時代には、アイメイトは声符（声による指示）で公衆電話を探すことができました。万が一道に迷って周囲に誰もいない時、今なら携帯電話で家族などに連絡するところですが、以前は公衆電話を探す必要があったからです。

■ 改札

反対に、新しくできた声符に駅の改札口を探す「カイサツ」があります。駅員さんが切符を切っていた時代には、ハサミのカチカチというリズムミカルな音を頼りに、どこに改札口があるか使用者が耳で認識できました。しかし、自動改札が普及するにつれ音がしなくなったため、アイメイトが探す形になったのです。

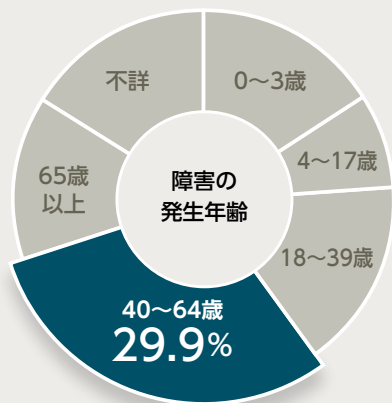
■ EV/HV

今、ガソリン車からEV（電気自動車）やHV（ハイブリッド車）への切り替えが進んでいます。静音性の高いEV/HV車はガソリン車に比べて音で認識しづらくなっています。そのため、接近してくる車の危険性を教える訓練にHV車を使うなどして、自動車への認識を向上するよう工夫しています。

高い中途失明の割合

日本の視覚障害者のうち、40歳を過ぎてから目が見えなくなった方はおよそ4割。その中で働き盛りの年代を含む40歳から65歳の割合がおよそ3割も占めます。病気や事故など、原因はさまざまで、決して人ごとではありません。

特に中途失明の場合、これまでできていたことができなくなってしまったと、人生そのものに絶望する方も少なくありません。それでも、アイメイトによって安全でスピーディな歩行ができるようになると、多くの方が前向きな気持ちを取り戻します。



資料：厚生労働省「身体障害児・者実態調査」(平成13年)



30代で失明したアイメイト使用者
八方順子さん

視力を失ってからは子供がヨチヨチ歩くような形でしか歩けなかったのが、アイメイトがいればスタスタ歩ける。アイメイトはすごいと思いました。

銀座での忘れ得ぬ光景

銀座は「歩行の自由」の象徴

日本には11の盲導犬育成団体があるが、この国で初めて盲導犬を育てたのは、「盲導犬の父」と呼ばれるアイメイト協会の創設者、塩屋賢一である。戦後間もなく独学で自分の愛犬を使って盲導犬の育成法を確立した。そして、やはり戦後の日本で初めて盲導犬歩行を志した当時大学生の河相洌（かわい・きよし）さんとの出会い、1957年に河相さんとシェパード犬の「チャンピイ」を国産盲導犬第1号のペアに育て上げた。

河相さんとチャンピイの歩行指導は河相さんの実家がある東京・大森で行われたが、河相さんらごく初期の使用者を除き、今日までに誕生した1400組以上のアイメイトペアは、練馬区のアイメイト協会や吉祥寺周辺で4週間にわたって歩行指導を受けた後、銀座で卒業試験を受けている。

アイメイト歩行が目指すのは、全盲の視覚障害者が、第三者の力を借りず、犬だけで自由に歩くこと。そして、全国に〇〇銀座という繁華街があるように、昭和の日本一の繁華街といえば、誰がなんと言おうと銀座であった。日本で一番賑やかな街を颯爽と歩ければ、どこへでも行ける。つまり、自らが掲げる「歩行の自由」の精神を体現できる場所として、塩屋賢一は銀座を選んだのだ。

雨の銀座で見せた涙

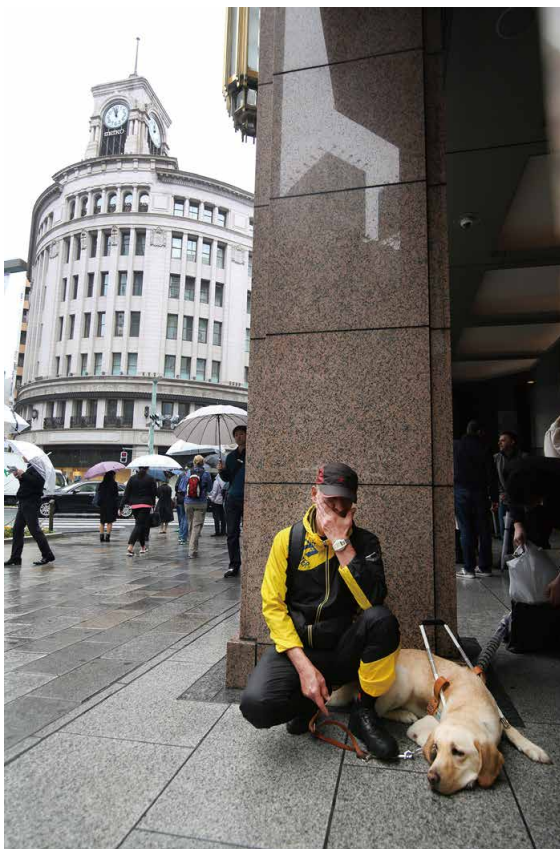
アイメイトは視覚障害者の目であり、雨でも外出しなければならないのは視覚障害者でも晴眼者でも同じだ。銀座の卒業試験も例外ではなく、雨天でも行われる。そんな、ある年の雨の銀座での光景が忘れられない。無事

パートナーと歩き終えた男性が、ゴール地点の三越デパートの軒下にスッと入り、何よりもまず、アイメイトの体をタオルで丹念に、いたわるように拭いた。そして、柱に寄りかかって、人目につかないように静かに顔を覆って涙を流した。アイメイトはかたわらに伏せ、感傷を共にしているように見えた。

男性にとっては2頭目のアイメイト。僕は以前から男性とは面識があったのだが、男気に溢れ、人前で涙を見せるようなタイプではない。それでも、そして2度目の銀座であっても、込み上げるものがあった。

アイメイトは、乗り物やロボットとは違う「生きた目」だ。温かい絆の誕生の瞬間は、人に見せるような軽いものではないかもしれない。それを黙って撮るのは失礼だと承知で、僕はシャッターを切った。

本稿は、プレミアムドッグフード専門店・通販「ポチの幸せ(POCHI)」で連載中のフォトエッセイ「Dog Snapshot R」を加筆修正したものです。



■内村コースケ (写真家)

1970年ビルマ（現ミャンマー）生まれ。少年時代をカナダとイギリスで過ごした。早稲田大学第一文学部卒。中日新聞の地方支局と社会部で記者を経験後、カメラマン職に転じ、同東京本社（東京新聞）写真部でアフガン紛争などの撮影に従事した。2005年よりフリーとなり、「撮れて書ける」フォトジャーナリストとして、ペット・動物愛護問題、地方移住、海外ニュース、帰国子女教育などをテーマに撮影・執筆活動をしている。特にアイメイト（盲導犬）関係の撮影・取材に力を入れている。ライフワークはモノクロのストリート・スナップ。日本写真家協会（JPS）正会員。

支援の輪

企業・団体掲載順：五十音順

アイメイト協会は、協会事業の趣旨に賛同する数多くの企業・団体からさまざまな形で支援を受けています。アイメイト協会の事業は皆さまのご協力により支えられています。温かいご支援に、心より感謝しお礼申し上げます。



アサヒ飲料(株)



(株)エボスカード



(有)真美堂手塚箔押所



(株)千修 千修吹奏楽団



第一生命保険(株) マルチブランド販売推進部



(株)ティーガイア サステナビリティ推進部



東京信用金庫



(株)バンガードインターナショナルフーズ



(株)ミリオンインターナショナル



(株)メガネ・コンタクトの井上

私たちは

アイメイト協会

さまざまな支援の形

- 寄付・寄贈（株主優待・ポイント・商品の売上からの寄付などを含む）
- ドッグフードの提供
- 募金箱の設置

- マッチングギフト（社員から集まった募金額と同額を会社からも寄付）
- チャリティーグッズのあっせん販売
- 社員等への研修・啓発

- チャリティーコンサート
- 街頭募金で配るしおり作成
- 寄付型自動販売機の設置 など



小林製薬(株) 総務部



(株)シード



清水眼科



(株)そごう・西武



ソニー生命保険(株)



(株)帝国ホテル



日本石油輸送(株)



東京都遊技業協同組合



モスバーガー共栄会



(株)モスフードサービス



ロート製薬(株) かもがら基金

を応援しています

視覚障害者の自立支援のために



東京都知事
小池 百合子
Koike Yuriko

真のダイバーシティの 実現に向けて パラリンピックのレガシーを受け継ぎ

公益財団法人アイメイト協会が、その活動の原点である国産盲導犬第一号・チャンピイを社会に送り出してから65年の節目を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

貴協会は、長年にわたり盲導犬・アイメイトの育成に取り組み、その普及に多大なる貢献をしてられました。こうした活動は、視覚障害のある方々の生活の安定と福祉の増進はもとより、障害のある方の自立と社会参加を進め、社会全体の理解を深めていくことにもつながっています。また、アイメイトの育成は、視覚障害者御本人や貴協会の職員の方々の御努力はもとより、候補犬である子犬の育成、リタイア犬の飼育など、多くの方々の御協力により成り立っています。長年にわたり大変熱心に盲導犬の育成に関わってこられた関係者の皆様に敬意を表し、厚く御礼を申し上げます。



第40回 アイメイト・デー (2016年10月23日)

昨年、東京は夏季パラリンピックを二度開催した、世界で初めての都市となりました。このレガシーを更に高めていくことは、私たちの使命です。東京都は、「東京都障害者・障害児施策推進計画」を策定し、障害のある人もない人も、社会の一員として、お互いに尊重し、支え合いながら、地域の中で共に生活する社会を目指しています。

「共生社会の実現」「地域での安心した暮らし」「いきいきと働ける社会」、この3つを基本理念として、誰もが自分らしく働き、暮らすことができる真のダイバーシティの実現に向けて、これからも幅広い政策を着実に進めてまいります。

「人が輝く」多様性に溢れた素晴らしい東京を、皆様方と力を合わせ、創っていきたいと考えております。引き続き、皆様方の御理解と御支援、御協力をよろしくお願いいたします。

結びに、貴協会の更なる御発展と、皆様のますますの御健勝、御活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。





衆議院議員 厚生労働大臣
加藤 勝信
Kato Katsunobu



練馬区長
前川 耀男
Maekawa Akio

先人の努力を胸に

アイメイトの誕生から65周年を迎えられ、心よりお慶び申し上げます。長年にわたりアイメイトの育成訓練や視覚障害者への指導、啓発活動などに尽力されているアイメイト協会の皆様に深く感謝と敬意を表します。

1957年に塩屋賢一氏により、国産第一号の盲導犬『チャンピイ』が誕生しました。塩屋氏は、自ら目隠しをして試行錯誤しながら訓練に取り組むなど、日本における盲導犬育成の礎を築かれたほか、盲導犬のことを「私の愛する目の仲間」という意味を込めて「アイメイト」と呼び、盲導犬の地位向上にも尽くされました。

チャンピイの誕生以降、この65年間に協会から1400組を超える視覚障害者とアイメイトのペアが生まれています。当初から本拠を構える東京都練馬区は、私が高校時代を過ごした地でもあります。地域での地道な取り組みから始まった活動が、今日まで長く続いていることを心から誇りに思います。

今年は、身体障害者補助犬法成立・施行から20周年の節目の年でもあります。公共施設や飲食店など不特定多数の人が利用する施設での受け入れが義務化されましたが、今でも同伴拒否の事例が散見されます。鉄道やバスなどへの自由乗車を勝ち取ってきた塩屋氏ら先人の努力を、改めて胸に刻んで活動していかねばなりません。

昨年、私も出席した東京2020パラリンピックの閉会式で、盲導犬が大会ボランティアの一人を表彰の場にエスコートしていました。あくびをする盲導犬のかわいらしい姿がSNSで話題になったそうですが、世界的なイベントを通じて、盲導犬の認知度が上がっていくのは大変喜ばしいことです。今後も、あらゆる機会を通じ、視覚障害者とアイメイトの活動がさらに広がっていくよう、関係者の皆様とともに取り組んで参ります。

障害者が「特別な存在」ではなく

国産初の盲導犬、つまりアイメイトの誕生から65周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴協会は「視覚障害者福祉の増進」を目的として、65年の永きにわたり、アイメイトの理解・啓発や視覚障害者の抱える歩行問題解決、社会参加の促進に積極的に取り組んでこられました。平成29年からは区役所の庁舎を活用し、盲導犬の実践的な訓練を重ねて頂いています。

私にとって障害者（児）福祉は行政に取り組む原点です。昭和46年、社会福祉に従事しようと東京都に入り、国に先駆けて日本で初めて設置したばかりの都立障害者福祉センターに配属。リハビリの受付・相談からスタートして色々な現場で無我夢中で仕事に取り組みました。永く障害者の方々と交流を重ねるうち、障害者が地域から隔離された「特別な存在」であってはならない。自然にそう考えるようになり、今も身体に沁みついています。

去る4月の区長選挙で引き続き三期目の区長を務める事になり、改めて私の区政に寄せる期待を身に沁みて感じています。お約束した「改革ねりま第Ⅲ章」を必ず成し遂げようと固く心に誓っています。

障害者（児）福祉の充実はその重要な一環です。これまで実施した重度障害者グループホームの増設、医療的ケア児の発達支援、農福連携の推進などに加え、今後も医療的ケアに対応したショートステイの開始（区内初）、障害者の意思疎通支援の充実など、障害者の皆さんが、住み慣れた地域のなかで一人ひとりの個性を活かして生きられる社会を目指して、全力で取り組んでまいります。

最後に、アイメイト協会の益々の発展と、塩屋代表理事をはじめとする皆様の永年にわたるご尽力に心から敬意を表し感謝を申し上げるとともに、一層の活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

アイメイト事業をサポートするには

視覚障害者の 自立した自由な 歩行のために

ご支援のお願い

アイメイト協会は、自立した自由な歩行を通して視覚障害者の社会参加を促進し、もって視覚障害者福祉の増進に寄与することを目的として活動しています。この事業に賛同くださる皆様のあたたかい寄付・支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



寄付

●オンライン決済による寄付

アイメイト協会HPより、クレジットカードによるオンライン決済が可能です。個人でも法人でも利用できます。

月会員 毎月任意の一定額が寄付されます。

年会員 毎年任意の一定額が寄付されます。

今回のみ ご支援いただける時にいつでも任意の額が寄付できます。

※オンライン決済で一度に寄付できる額は
1,000円～1,000,000円です。

●振込、振替の場合

郵便局 郵便振替口座：00160-2-165100

口座名義：公益財団法人アイメイト協会

銀行 みずほ銀行 吉祥寺支店（普通）1277193

口座名義：公益財団法人アイメイト協会

代表理事 塩屋隆男

サポート会員

お申し込みいただいた方に、アイメイト協会よりご案内とお振込用紙をお送りしています。お申し込みは、お電話またはHPのお問い合わせフォームから、お名前・ご住所・お電話番号をご連絡ください。

会費 個人会員1口5,000円・法人会員1口50,000円
(何口でも可。申込み翌年からは毎年2月頃ご案内)。

募金箱への募金・設置

アイメイトの募金箱が、全国の商店、飲食店、病院などに設置されています。アイメイトのミニチュアと子犬の写真が目印です。アイメイト後援会やライオンズクラブによる街頭募金も随時行われています。募金にご協力をお願いいたします。

募金箱の設置をご希望の企業・団体、店舗様は、アイメイト協会にご連絡ください。募金箱をお送りします。



ボランティア活動 - 「アイメイト後援会」

「アイメイト後援会」は、アイメイト協会とアイメイト使用者を支援している協会公認のボランティア団体です。全国に200人以上の会員があり、半世紀にわたって活動を続けています。

●主な活動

- ・アイメイト協会主催行事への協力（アイメイト・デーの会場案内など）
- ・アイメイト協会同窓会（アイメイト使用者の会）の活動への協力
- ・街頭募金、グッズ製作・販売
- ・啓発イベントの開催
- ・後援会誌「ミニ通信」の発行



●アイメイト後援会HP

<https://www.eyemate-support.org>

チャリティグッズの購入 - 「アイメイトサポートグッズ」

「アイメイト後援会」が製作・販売するアイメイトグッズをご購入いただくと、収益がアイメイト協会に寄付されます。グッズは、人気のカレンダーをはじめ、文具、タオル、Tシャツ、アクセサリなど多数。いずれも、アイメイトやアイメイト候補犬の写真とイラストがデザインされています。ご購入はオンラインショップで。学園祭などのイベント会場でも随時販売しております。

●「アイメイトサポートグッズ・オンラインショップ」

<https://shop.eyemate-support.org>



犬の飼育ボランティア

アイメイト候補の子犬を預かったり、リタイア犬を引き取ったりするボランティア活動です。

詳細はアイメイト協会にお問合せください。

- ・飼育奉仕＝生後2ヶ月以降の子犬を協会で訓練を始める1歳過ぎまで預かります。
- ・リタイア犬奉仕＝アイメイトを引退したリタイア犬を家庭犬として引き取ります。
- ・不適格犬奉仕＝さまざまな事情でアイメイトにならなかった候補犬を家庭犬として引き取ります。



寄付・支援のお問合せは、アイメイト協会へ

電話：03-3920-6162

お問い合わせフォーム：<https://www.eyemate.org/inquiry/>

アイメイトの一生

生まれてからリタイアまで

アイメイトは視覚障害者の目として活躍するまで、どこで生まれてどのように成長するのでしょうか？
引退後の生活は？この章では、生まれてからリタイアまでのアイメイトの一生と、
不適格犬(家庭犬となった元候補犬)の暮らしを写真でお見せします。



誕生

アイメイトは、「繁殖奉仕」と呼ばれるボランティア家庭で生まれます。繁殖犬は、アイメイト候補犬の中からオスメス共に特に資質に優れた犬が選ばれます。メスの繁殖犬を預かる奉仕家庭では、出産と生後2カ月までの子育てのお手伝いをします。オスの繁殖犬は、交配に備えて繁殖奉仕の家庭で大切に預かります。



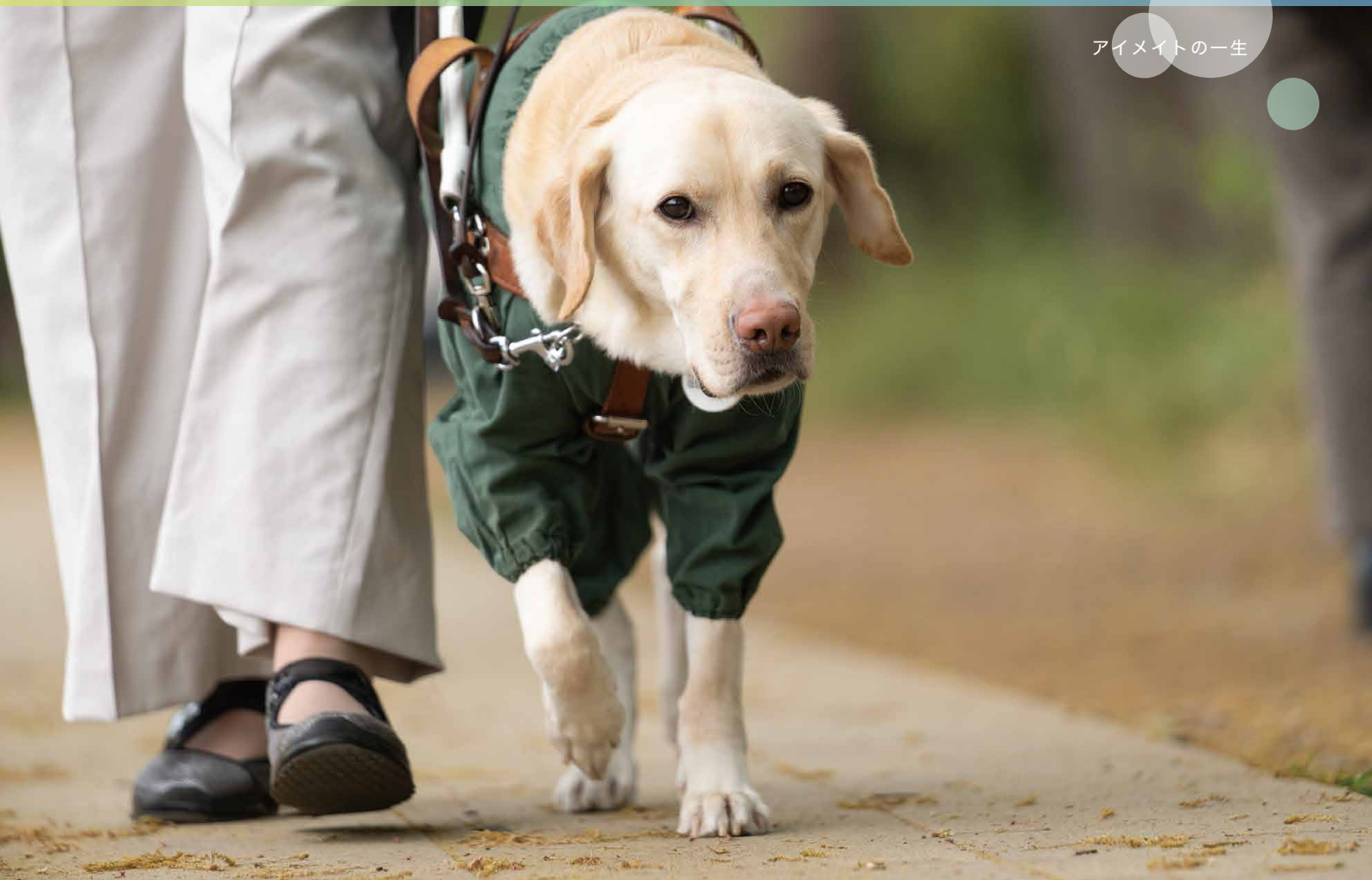
訓練・歩行指導

1歳2カ月を過ぎた頃アイメイト協会へ戻り、歩行指導員から約4カ月間の訓練を受けます。続いて、使用希望者と4週間の歩行指導合宿を行います。



成長

生後2カ月を過ぎると、今度は「飼育奉仕」と呼ばれるボランティアの元へ。そこで約1年間、家族から愛情を受け、色々な経験をのびのび育ちます。



現役



歩行指導を修了すると晴れてペアで卒業です。アイメイトは深い信頼で結ばれたパートナーといつも一緒。目として活躍しながら歩行を支えます。

リタイア



アイメイトに定年はありませんが、年齢や体調などを考慮し、使用者が引退時期を判断します。そして、「リタイア犬奉仕」のボランティアのもとで家庭犬として余生を過ごします。



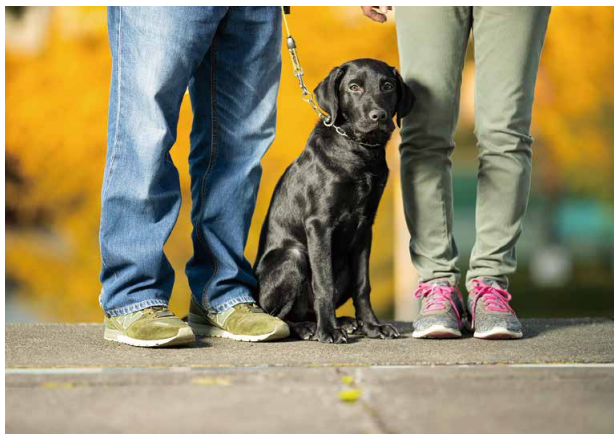
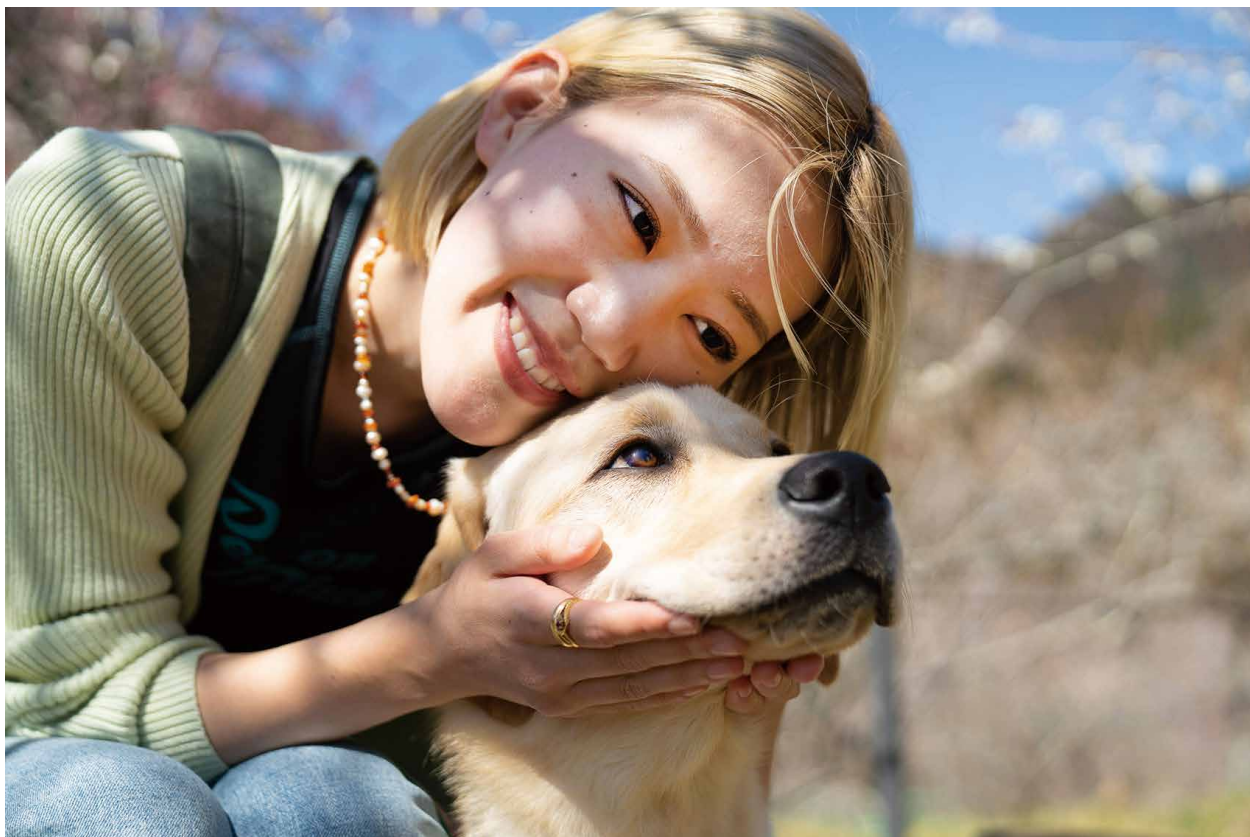
家庭犬への道

候補犬全体の7～8割はアイメイトになりますが、車酔いしやすいなどさまざまな理由で向かない犬もいます。ボランティア家庭に引き取られ家族の一員として過ごします。

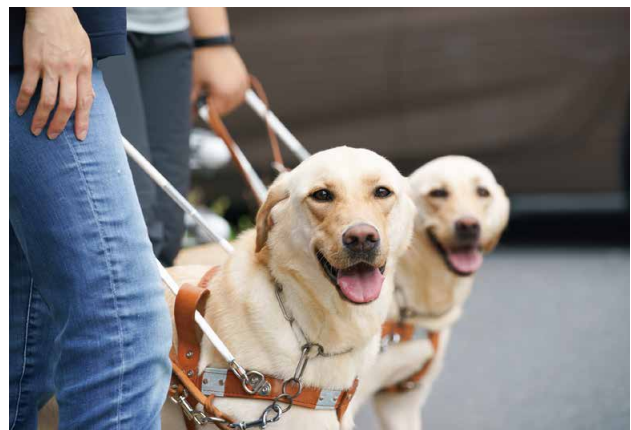
誕生 母犬に甘え、兄弟姉妹仲良く過ごす 2 カ月



成長 人との愛を育む1年

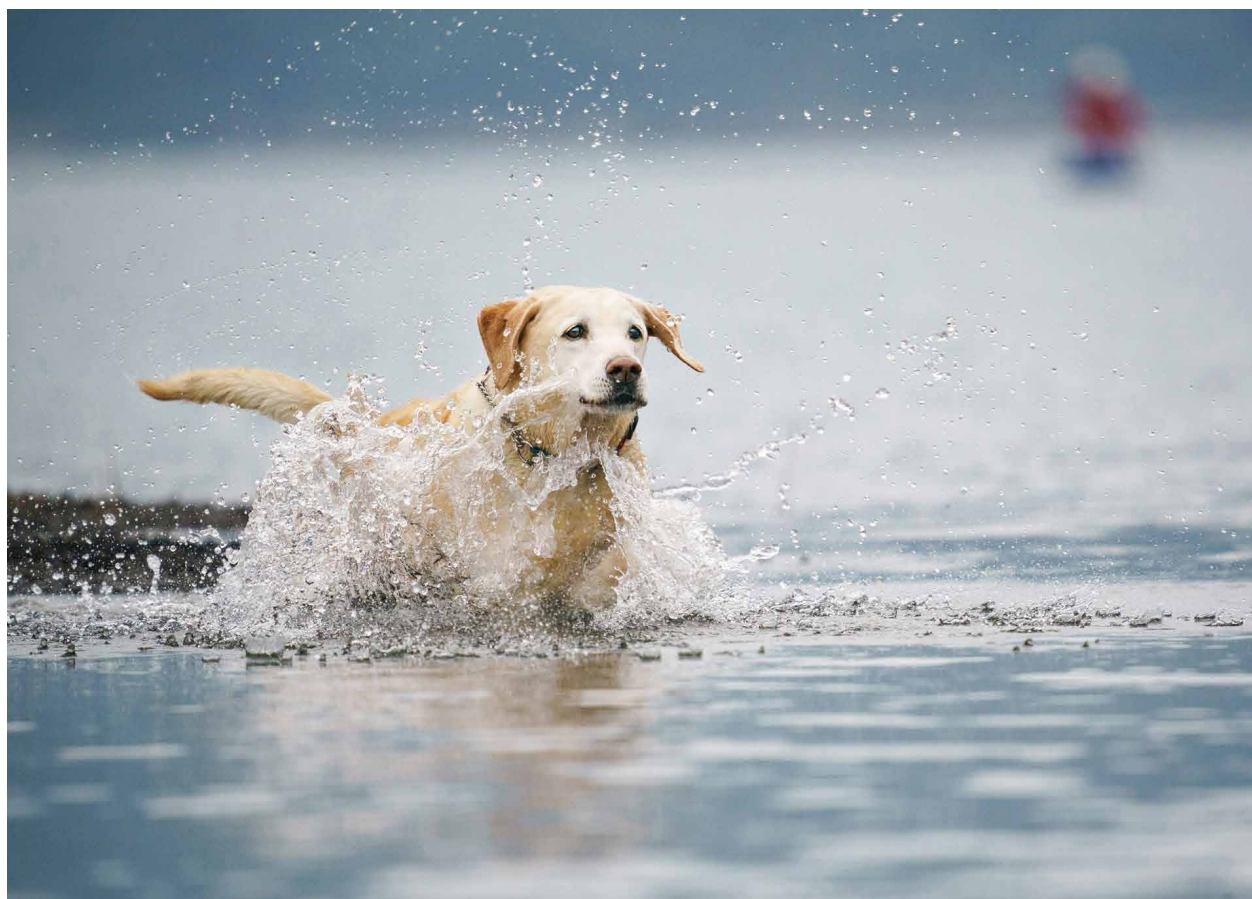


訓練と歩行指導 学びと運命の出会い



リタイア・不適合

家庭犬への道 それぞれの幸せのかたち



現役 パートナーとの絆は永遠に

